

ジュリアン:クリスマス・ストーリー
Julian: A Christmas Story

ロバート・チャールズ・ウィルソン
Robert Charles Wilson

Nippon2007 ヒューゴー賞候補作品 ノヴェラ部門
Nippon 2007 Hugo Nominees Best Novella

小笠原はるの+増田まもる訳

本作品は原作者の希望により、第65回世界SF大会/第46回日本SF大会
Nippon2007 参加者向けに翻訳・公開されているものです。

無断複製・転載を禁止します。

Nippon2007 実行委員会

1.

これは、ジュリアン・コムストックについての話である。不可知論者ジュリアン、あるいは、(彼の叔父にちなんでつけられた) 征服王ジュリアンとしてのほうがよく知られているが、これは、彼の征服——名ばかりのものだが——についての話でもないし、彼の背信、あるいはラブラドル戦争、あるいはジュリアンがドミニオン教会とくりひろげた口論についてでもない。ぼくは、こういった多くの出来事を目の当たりにしてきた——そして、おそらく最終的には、それらについて書くことになるだろう——しかし、この物語は、ジュリアンが若く、ぼくも若く、そして二人とも有名ではなかったころの話だ。

2.

二一七二年十月の終わり——選挙の年だった——ジュリアンとぼくは、ジュリアンの教育係サム・ゴドウィンと一緒に、馬に乗ってウィリアムズ・フォードの東にあるティップへ向かった。そこで、ぼくは一冊の本を手に入れ、ジュリアンから異端説のひとつを教わることになる。

さわやかに晴れた日だった。当時、アサバスカ州のその地方では、季節は正確に巡っていた。夏は長くて、けだるく暑い。春と秋は短く、両極端の気候のたんなる管理機能にすぎなかった。冬は短かったが、身を切るように寒かった。十二月の終わりごろに雪が降り始め、だいたい三月の終わりにまでにパイン川の氷が解けた。

今日が、この秋で一番の天気かもしれない。ぼくたちはサム・ゴドウィンの指導のもと、スパーリングかターゲット射撃、あるいはユニオンのドミニオン教会の歴史から数章を読むことになっていた。しかし、サムは冷酷な指導者ではなかったし、天気の穏やかさは遠出の可能性を暗示していた。それで、ぼくたちは、ぼくの父さんが働いている厩舎に行き馬を出し、黒パンと塩漬けのハムの弁当を背負い鞆に入れてエステートを出た。

ぼくたちは、丘陵と町から離れて東へ向かった。ジュリアンとぼくが先頭に立ち、サムは用心深くその後ろについて、鞍につけたホルスターにはいつでも使えるようピッツバーグライフルが入っていた。差し迫った危険があるわけではなかったけれど、サム・ゴドウィンは不断の準備を信奉していた。彼に信条があるとすれば、それは準備を怠らないこと、また、先制攻撃すること、そしておそらく、結果を気にしないことだった。サムは年配(五十歳に近い)で、ところどころに針金のような白髪が混じった茶色いあごひげをはやしていたが、カリフォルニア陸軍の黄褐色と緑色の迷彩服でまだかろうじて人前で着られるものと、風よけの外套を身につけていた。彼は、ジュリアンにとって、父親のような存在だった。ジュリアンの実の父親は、数年前に絞首刑にされていた。最近彼は以前よりずっと用心深くなっていたが、その理由については、少なくともぼくには、話してくれなかった。

ジュリアンとぼくは同い年(十七歳)で、ぼくたちはほぼ同じ背丈だったけれど、似ているのはそこまでだった。ジュリアンは貴族の生まれで、ぼくの家は平民だった。彼の肌は透き通るように白く、

ぼくの皮膚は浅黒くてあばただけだった。(六三年に妹のフラキシーを死なせたのと同じ天然痘にかかって痕が残ったのだ。)彼の髪は長くてまるで女性のようにさらさらだったが、ぼくの髪は黒くごわごわしていて、母さんの裁縫ばさみでざくざくと刈られ、頭を洗うのも週に一度程度だった——夏になって、小さな家の裏手にある小川が冷たくさらさらと流れるときには、もうちょっと頻繁に洗ったけれど。ジュリアンの服は亜麻布で、ところどころに絹があしらわれ、真鍮のボタンがついていて、ぴったり合うようにカットされていた。ぼくのシャツとズボンも粗い麻布で、かなりよく似た形に縫われていたけれど、ニューヨークのテーラーが仕立てたものではないことは明らかだった。

それでも、ぼくたちは友だちで、知り合って三年たっていた。最初に偶然出会ったのは、ダンカン&クラウリー・エステートの西側にある樹木の生い茂った丘で、そのとき、二人とも狩りをしていて、ジュリアンは、ポーター&アールの優美なカセットライフル、ぼくは単純なマズルローダーライフルを手にしてた。ぼくたちはともに本が好きで、とくに、チャールズ・カーティス・イーストン[彼が六十歳のとき、ぼくは彼に会うことになる。そのときぼくは出版業界の新参者だったが、それはまた別の物語だ]という作家が当時書いていた少年小説がお気に入りだった。ぼくはイーストンの『ブラジル人への抵抗』を持っていた。エステートの図書館からこっそり借りたもので、ジュリアンは題名を見て、それに気づいていたけれど、黙っていてくれた。彼も、ぼくと同じくらいその本が好きで、愛読者(貴族の親族の中にはほんのわずかしかなかった)と話したくてたまらなかったからだ——つまり、頼んでもいないのに彼はぼくに好意的で、ぼくたちは、お互いに違いがあるにもかかわらず、親友になったのだ。

はじめぼくは、ジュリアンがどれほど神に冒瀆的な言動をとりたがるか知らなかった。しかし、一緒に過ごすようになって、それがわかってきた。でもだからといって、彼とのつきあいをためらうことはなかった。そんなには。

町を出発したとき、ティップを訪れるというはっきりした目的があるわけではなかった。しかし、最寄りの十字路で、ジュリアンは西に曲がり、すでに収穫の済んだトウモロコシ畑やヒョウタン畑の中を進んでいった。丸太を割って作った柵は日光に漂白されて、ブラックベリーの花がからみついていた。空気は冷たかったけれど、太陽はまぶしい光を放っていて、ジュリアンとサムは、日よけのためにつばの広い帽子をかぶっていた。ぼくは、汗染みのついた質素な亜麻布のパクール帽を、耳のあたりまで下ろしていた。やがて、ぼくたちは、契約労働者たちの粗末な掘っ立て小屋の最後の数軒の前を通り過ぎた。裸同然の子供たちが、道端から、ぼくたちをぼかんと見つめていた。ぼくたちがティップに向かっているのは明らかだった。というのも、この道はほかにもどこへつづいているというんだらう?——東に向かって何時間も歩きつづけ、偽りの審判の時代から残された古い町の廃墟まではるばる行かないかぎり。

ティップは、不法侵入や騒動を防ぐために、ウィリアムズ・フォードから遠く離れたところに置かれていた。ティップには厳格な序列がある。それは次のようなものだ。エステートに雇われた専門の廃品回収人が、廃墟となった場所から回収してきた品物をティップに運ぶ。それは牧草とプレーリーの花の咲く地面の一面を松材のフェンスで囲った囲い地(営倉のようなもの)である。新たに届いた

品物は、そこで大ざっぱに仕分けされ、上流階級の貴族たちに最新の収穫を知らせるために、馬にまたがった伝令たちがエステートに送り出される。すると、さまざまな貴族（あるいは信頼されている召使）が、値打ちのありそうな掘り出し物を求めにやってくる。その次の日、平民階級のものたちが、残ったものをあさるのを許され、そのあと、もしまだ残っているものがあつたら、契約労働者たちが物色しにくる。もっとも、そうするだけの価値があると判断しての話だが。

繁栄している町ならどこにでもティップがあつた。東部では、ティルとかダンプとかイーベイと呼ばれているようだ。

今日、ぼくたちはついてきた。荷馬車二、三台分の収穫物がついさつき到着したばかりで、乗り手たちはまだエステートに送られていなかった。入り口には守衛がいて、うさんくさそうにぼくたちを見つめたが、サムがジュリアン・コムストックの名を告げると、すばやく脇へ退き、ぼくたちは囲いの中に入っていった。

積荷の多くはまだ下ろされていなかった。馬から降りてつないでいると、丸々としたティップマンが、大漁を見せびらかせようと、大急ぎでぼくたちの方に駆け寄ってきた。「なんという嬉しい偶然でしょう？」と彼は声をあげた。「みなさま！」ほとんどサムに向かってあいさつし、ジュリアンには慎重に笑いかけ、ぼくにはさげすんだようなまなざしを向けた。「何か特別なものをお探しですか？」

「本だ」サムとぼくが答えるよりも先に、ジュリアンが間髪入れずにいった。

「本ですと！ 本はいつもドミニオン教会の保存管理者に渡すので、取りのけてあるのですが……」

「この少年はコムストックだ」とサムがいった。「応じないつもりではないだろうな？」

ティップマンは顔を赤らめた。「いや、とんでもない……実は、発掘中に偶然見つかったんです……小規模な図書館らしきものが……よかったら、お見せします」

とりわけジュリアンにとって、それは興味をそそられる話だった。彼は、クリスマスパーティに招待されたかのように、顔を輝かせた。ぼくたちは、でっぷりしたティップマンの後について、到着したばかりの帆布張りの荷馬車へ向かった。そこでは作業員が、束になった荷をテントのそばに積み重ねるように、荷馬車から放り投げていた。

ぐるぐる巻きに梱包された荷は本だった……古くて、ところどころ破れていて、ドミニオン教会の承認印は全く押されていない。一世紀以上前のものに違いない。色はあせていたけれど、かつては色鮮やかで、贅沢な紙に印刷されていたことがわかる。現代のチャールズ・カーティス・イーストンの本のような、茶色いごわごわのパルプ紙ではなかった。それほど朽ちてはいなく、さわやかなアサバスカの陽光を受けたそれらの本に、不快な感じはしなかった。

「サム！」ジュリアンが小声でいった。すでにナイフを取り出して、より糸を切り始めている。

「落ち着くんだ」とサムがいった。彼はジュリアンと違って、それほど古い本には興味を持っていなかった。

「でも、ああ——サム！ 荷車を持ってくるべきだったよ！」

「腕いっぱいの本だって持って帰れないんだ、ジュリアン。そもそも許されていないのだから。これはみんな、ドミニオン教会の学者たちのものになるんだ。一冊か二冊ぐらいいはかまわないだろうが」

ティップマンがいった。「これらは、ランズフォードでみつかったんです」ランズフォードとは、五十キロほど南東に行ったところにある廃墟の町の名前だった。ティップマンは、自分と同年ぐらいのサム・ゴドウィンの方に身を寄せて、こういった。「ランズフォードは、十年前に掘り尽されたと思われていました。しかし、涸れた井戸でもよみがえることがあります。わたしの部下の一人が、発掘地の中心部から離れた場所に、低くなっているところ——陥没した穴のようなものがあるのに気がつきましてね。このところの雨で崩落したのです。以前は、地下室か倉庫のようなものだったようです。なんと、そこには、結構な陶器やガラス製品、それからこれよりもっと多くの本がありました……ほとんどはカビが生えていましたが、いくつかのものは、ごわごわした油布のようなもので保護されていて、半壊した天井の下にあったんです……火災にあったようですが、焼失を免れたんです……」

「みごとな仕事だ、ティップマン」サム・ゴドウィンがいった。

「ありがとうございます！ できましたら、エステートのお偉方にわたしのことを伝えていただけたらとありがたいのですが？」そして、彼は名前を名乗った（すっかり忘れてしまったが）。

ジュリアンは、固めた粘土とティップのがらくたの山の中でひざをつき、順々に本を取り上げては、大きく見開いた目で、一冊一冊調べていった。ぼくもその調査に加わった。

ぼくはそれまであまりティップが好きではなかった。ぼくにとっては、いつも幽霊が出そうな場所だったからだ。そして、もちろん、そこは幽霊の出る場所だった。それが、その存在の意味だった。過去の亡霊に居場所を与える場所なのだ。一世紀もの長い眠りからはっと目覚めた、偽の審判の時代の亡霊者たちの場所なのだ。悪徳と浪費の時代には、格段に富めるものと格段に貧しきものが住んでいたという証拠がここにあった。彼ら的高级品は、それは素晴らしいもので、特にガラス製品がそうだった。事実、どこかの廃墟から救い出されたアンティークのテーブルセットを持っていない貴族は、生活に困窮した貴族だった。ときには、箱入りの銀製食器や役に立つ道具や硬貨も見つかった。硬貨はたくさん出て来たので、ひとつひとつにはたいした値打ちはなかったけれど、ボタンや他の装飾品に加工することができた。エステートに住む上流階級の一人は、銅貨をちりばめた鞍を持っていて、その銅貨のすべてが二〇三二年製だった（ときどき磨いてくれといわれたことがあるんだ）。

しかし、ここにはまた、がらくたやわけのわからないかけらもあった。プラスチックは陽光にさらされてもろくなるか、土壌の湿気でやわらかくなっていた。金属の破片にはさびが生じ、時間が経って黒ずんだ電子装置には、衰れを誘うほど伸びきって、役に立たなくなったバネがついていた。エンジンの部品は腐食し、銅線の表面には緑青がふいて、アルミニウム缶と鋼製容器は、かつてそこに入っていた有毒な液体に腐食されていた——などなど、そのリストは無限につづいた。

ここにはまた、どちらともつかない、好奇心をそそられる珍品もあった。みにくい、あるいはきれいな品々は、貝殻のように魅力的で使い物にならなかった。（「その錆びたトランペットを下ろしなさい、アダム。唇が切れて毒が体にまわるわよ！」——と母さんにいわれたことがある。ジュリアンに出会う何年も前に、ぼくたちがティップに行ったときのことだ。どっちみち、トランペットは音が出なかった。ベルが曲がっていて、中が腐食していたからだ。）

だが、それ以上に、気にかかることがあった。こういったものは、高級であろうが、壊れていよう

が、作り手よりも長く生き延びた——肉体や精神より滅びにくいことを証明した（なぜなら、世俗的な昔の人の魂は、ほとんど間違いなく、キリストの復活の際に最初に救われるものではないからだ）という思いだった。

だがそれでも、こういった本にぼくは……誘惑された。それらは誘惑を大胆にみせつけるのだった。ある本では、信じられないくらい美しい女性が、さまざまな角度から、裸体を見せていた。ぼくはすでにエステートにいる若い女性たちに、自分の美德を犠牲にして、むこうみずにキスしたことがあった。十七歳のぼくは、いっばしのすれっからしにでもなったつもりだった。でも、こういった画像は、あからさまに淫らで、ぼくは顔を赤らめて、本から目をそらした。

ジュリアンはあっさりとしてそれらを無視した。いつだって女性の魅力に打ち勝つことができたからだ。彼はもっと大きくて、字がぎっしりつまっている本を好んだ——すでに生物学の教科書が脇に置かれていた。ぼつぼつと染みが浮いて変色していたが、ほとんど無傷だった。彼は同じくらいの大きさの本を見つけて、ぼくに手渡した。「ほら、アダム、これを読んでごらん——啓蒙的な本かもしれないよ」

ぼくは疑いながらその本を調べた。それは『宇宙における人類の歴史』という本だった。

「また月の話だ」とぼくはいった。

「読んでみなよ」

「でたらめに決まっている」

「写真があるじゃないか」

「写真なんか何の証明にもならないよ。あの人たちは写真を自在に加工できたんだから」

「まあ、とにかく読んでみな」とジュリアンがいった。

実のところ、ぼくはその提案に興味した。ジュリアンとぼくは、何度もこの議論をしてきた。特に月がまだ低くて、地平線上にどっしり腰をすえているように見える秋の夜には。かつて人があそこを歩いたことがあるんだと彼はよくいった。初めて彼がそういったときには、ぼくは笑い飛ばした。その次のときにはこういった。「ああ、確かにね。ぼくもつるつるする虹を伝って登ったことがあるよ——」しかし、ジュリアンは真剣だった。

ああ、そういう話なら聞いたことがある。聞いたことのないものなんているのだろうか？ 月に立つ人類。ぼくが驚いたのは、ジュリアンのように教養のあるものでさえ、それを信じていることだった。

「その本、持っていきなよ」とジュリアンがいった。

「え、ぼくのものにしろってということ？」

「もちろんさ」

「じゃあ、そうしよう」ぼくはそっとつぶやいて、それを背負い鞆につこんだ。誇らしさと同時に罪悪感をおぼえた。ドミニオン教会の承認印がない書物を読んでいると知ったら、父さんは何ていうだろう？ 母さんは何て思うだろう？（もちろん、二人には黙っているつもりだったけれど。）

この時点で、ぼくは本の発掘をやめ、がれきの山から少し離れたところに草地の一面を見つけ、腰を下ろして持ってきた弁当を食べながら、ジュリアンが、学者のような執念で、残がいより分けて

いるのを見守った。サム・ゴドウィンがぼくに加わり、寄りかかっても軍服が汚れないように、古い木材のほこりを払った。もう汚れていたけれど。

「あいつは、ほんとに、ああいう古い本が大好きだねえ」ぼくは話しかけた。

サムはいつも無口だった——絵に描いたような退役軍人だ——しかし、うなずいて、気さくに応じてくれた。「本を愛することを学んだのさ。わたしも手を貸した。いいことだったのかどうかかわからないが。夢中になりすぎているような気がする。いつかそのうちに、ジュリアンは、本に殺されてしまうかもしれない」

「どうやって、サム？ 本の背教によって？」

「ジュリアンは賢すぎて身を滅ぼすかもしれない。ドミニオン教会の聖職者と議論するんだ。先週も、ベン・クリール[ドミニオンの協議会のこの地区の代表者、要するに、ぼくたちの町の町長だ]と、神や歴史やそういう抽象的なものについて議論していた。これから数年間を生き延びたければ、それだけはやしてはならないことなのだが」

「えっ、彼はどんな脅威にさらされているの？」

「権力者たちのねたみだ」とサムは答えたが、それ以上は何もいわなかった。ただ座って、白くなりかけたあごひげを撫で、ときたま不安そうに東の方向に目をやった。

時間が経って、ジュリアンはようやく本の巣から体を引き離した。持って帰れる賞品は二冊。『生物学入門』と『北アメリカの地理』という本だけだった。行く時間だ、とサムが強くいっただ。夕食までにはエステートに戻っていた方がいい。ともかく、乗り手たちがすでに送られて、選別専門の役人やドミニオンの学芸員たちが、残りのものを選び分けに、まもなくここにやって来るだろう。

ところで、ぼくはジュリアンから背教のひとつについて教わったと聞いた。それはこうして起こった。けだるい午後も終わるころ、ぼくたちは、尾根の一番高いところで歩みを止めた。そこからは、ウィリアムズ・フォードの町が見渡せた。パイン川の上流に壮大なエステートがあり、川は西側の山から谷を通して流れている。見晴らしのよいこの場所からは、ドミニオン・ホールのとんがり屋根、くるくる回る水車のある製粉所、それから製材所などが見えた。空気は斜めに差し込む日の光の中で青みがかっていて、薪を燃やす煙でかすんでいた。まだ紅葉が残っていて、あちこちが紅色に染まっている。はるか南には、鉄道橋が、浮かんだ糸のようにパイン溪谷にかかっている。「中に入りなさい」と天気が高らかに叫んでいるようだった。「晴れているけれど、長くはつづかないよ。窓を締めて、火をかき立て、りんごを煮なさい。冬はもうじきやってくるよ」と。ぼくたちは風が吹きつける丘の上に馬を休ませた。ジュリアンがブラックベリーの茂みを見つけた。ベリーはまだふっくらとしていて、色も黒く、ぼくたちはそれを摘み取って食べた。

これがぼくの生まれた世界だ。それは、ぼくが思い出せるあらゆる秋と同じような秋だった。しかし、ぼくはティップとその亡霊たちについて考えずにはいられなかった。おそらく、彼ら、つまり石油の全盛期と偽りの審判時代を生きた人々は、ぼくがウィリアムズ・フォードに対して感じるように、彼らの故郷やその周辺に対して思うものがあつたのかもしれない。ぼくにとって彼らは幽霊だったが、

彼らにしてみたら、自分たちが十分実在していると思っていたに違いない——実在していたに違いない。もしも自分たちが幽霊だと気づいていなかったら、ということは、ぼくもまた幽霊、未来の世代につきまとう亡霊だということなのだろうか？

ジュリアンはぼくの表情を見て、どうしたのかと訊ねてきた。ぼくは、考えていたことを話した。

「今やきみは、哲学者のように考えているね」と彼は言って、にやりと笑った。

「道理で、彼らはあんなにみじめな群れのわけだ」

「それは公平じゃないよ、アダム——生まれて一度も哲学者に会ったことがないだろう」ジュリアンは哲学者を信じていて、一人か二人に会ったことがあると公言していた。

「まあ、彼らがみじめだというのはぼくの想像だけだ。自分たちが幽霊か何かだと思っているのならね」

「それは、あらゆるものの条件だ」ジュリアンがいった。「例えば、このブラックベリーだ」彼はそのひとつを摘み、青白い手のひらの上に置いた。「これは、いつもこんな風に見えるかい？」

「もちろん違うよ」とぼくはいらいらしていった。

「かつては小さな緑色の芽だった。その前は、蔓の物質の一部で、その前はブラックベリーの内部にあった種だった——」

「そして、それを永遠に繰り返す」

「いや、違う、アダム。そこが重要なんだ。蔓、そして向こうにある樹木、畑に植わっているヒョウタン、そのまわりを歩き回っている牛——彼らはみな、それほど似ていない先祖の子孫なんだ。ブラックベリーや牛は形にすぎない。空を横切る雲が、その形を変えるように、形は時間とともに変わるんだ」

「何の形なんだい？」

「DNAだ」ジュリアンはまじめにいった。(ティップで拾った『生物学』の本は、彼が読んだ最初の『生物学』ではなかった。)

「ジュリアン」サムが警告した。「わたしは、この少年の両親に、きみが彼に悪い影響を与えるようなまねはしないと約束したんだ」

ぼくはいった。「DNAのことは聞いたことがあるよ。世俗的な古代人たちの生命の源だと。それは神話だよ」

「人類が月の上を歩いたように？」

「そのとおり」

「では、その根拠はどこから来たんだい？ ベン・クリールかい？ 『ユニオンのドミニオン教会の歴史』かい？」

「DNAのほかに変わらないものはないと？ きみがいうにしては、おかしい主張だよ、ジュリアン」

「もしぼくがでっちあげているんだったら、それはそうだろう。でも、DNAは決して不変ではない。みずからを記憶しようとあがいているが、決して完全に記憶することはできないんだ。魚を記憶しようとして、トカゲを想像してしまう。馬を記憶しようとして、カバを想像してしまう。サルを記憶し

ようとして、ヒトを想像してしまうんだ」

「ジュリアン！」今度はサムの口調は強かった。「もう十分だ」

「まるでダーウィン主義者みたいだ」とぼくはいった。

「そうさ」ジュリアンは認めた。正統な意見でないにもかかわらず、彼は笑みを浮かべた。秋の日差しが彼の顔を銅貨色に染めている。「そうだと思うよ」

その晩、ぼくはベッドに横になり、確実に両親が眠ったと判断してから起き上がると、ランプをつけ、オーク製の化粧ダンスの裏に隠しておいた新しい（いやむしろ、とても古い）『宇宙における人類の歴史』を取り出した。

ぼくは碎けやすいページをパラパラとめくった。読んではいなかった。いつか読むつもりだけれど、今晩は疲れきっていて、じっくりと読む気になれなかった。いずれにしても、ぼくは言葉を味わって読みたくて（たとえそれがうそや作り話であっても）、急いで終わらせたくなかった。今晩は味見だけしかかった。つまり、写真を見るということだ。

写真はたくさんあって、ぼくはそれぞれの新鮮な驚異と信じがたさに注意を引きつけられた。そのうちの一枚に写っているのは——あるいは、写っているといわれているのは——ジュリアンがいったとおりの、月面に立っている人間だった。

写真の人間は明らかにアメリカ人だった。宇宙服の肩のところに旗が縫いつけられていて、それはぼくたちの旗の初期のヴァージョンで、星の数が現在の六十個よりちょっと少なかった。服は白くて、イヌイットの防寒服のように、ばかばかしいほどかさばっていた。バイザーがついたヘルメットをかぶっているので顔が見えなかった。探検家たちがそんな面倒な防寒をしなければならなかったのなら、月の上はとても寒いに違いない。彼らは冬に着陸したに違いない。けれども、付近に氷や雪は見えなかった。月は砂漠とそれほど変わらないように見えた。枯れた枝木のように乾いていて、ティップマンの服のようにほこりっぽそうだった。

どのくらいの間、その写真を見てあれこれ考えていたかわからない。一時間か、もっと経っていたかもしれない。ぼくがどういう気持ちになったのか、正確に説明することもできない……自分より大きくなって、でも孤独で、まるで星に届くほど大きくなって、見慣れたものすべてを見失ったかのような気がした。本を閉じたときには、窓の外に月が昇っていた——本物の月、収穫月だ。満月で、オレンジ色で、形を変えながら流れている雲に、半分隠れていた。

気がつくともぼくは、人類が天体に行ったのは本当に可能だったのだろうかと考えていた。写真が物語っているように、ロケットであそこまで行ったのだろうか。独立記念日の花火の何千倍も大きなロケットで。でも、もし人類が月に行ったとしたら、どうしてそこにとどまらなかったんだろう？ 誰もいたがらないような、住みにくい場所だったんだろうか？

あるいは、そこにとどまって、まだ住みつづけているのかもしれない。もし月がそんなに寒いところだったら、そこに住んでいる人たちは暖をとるために、火を焚いているかもしれない。ぼくはそう推測した。写真からみると、月には木がないようにみえた。そうすると、彼らは石炭か泥炭を使って

いるに違いない。ぼくは窓辺に行き、たき火や採鉱やそのほかの産業のしるしがないか注意深く観察した。しかし、何も見えなかった。それはただの月で、表面に模様があるだけで、変わったことはなかった。ぼくは自分がだまされやすいことを恥ずかしく思った。本を隠し場所に戻すと、お祈り（というか、即席で考えたそれらしいもの）を唱えて、こういった異端説を頭から追い払い、そのうち眠りに落ちた。

3.

そろそろクリスマスだというときに、サム・ゴドウィンが恐れていたことが、ぼくたちの町で現実のものとなった。しかし、そのことを話す前に、ウィリアムズ・フォードのことと、その町でのぼくの家族の位置づけ——そしてジュリアンの立場——について、説明しておいたほうがいだろう。[もし誰もが知っていることを細かく説明しているように感じられたら、どうかお許しいただきたい。ぼくたちの現在の状態が自明ではない外国人、あるいは子孫たちがこれを読む可能性を考えているので]

谷の入り口に、ぼくたちの繁栄の源、ダンカン&クラウリー・エステートがあった。それは地方のエステートで（いうまでもなく、というのも、ぼくたちのいるアサバスカ州は、東部の政権の中心地から遠く離れているからだ）、ニューヨークで商業を営んでいるふたつの有力者家族が所有しており、大邸宅を収入源としてだけでなく、都市生活の陰謀や害毒に巻き込まれることのない、遠く離れた（列車で数日かかる）保養地のようなものとして維持していた。そこに住んでいたのは——支配していたといってもいだろうが——ダンカン&クラウリーの家長だけでなく、澄んだ空気と田舎の景色を求めてやってくる、いとこ、甥、姻族、上流階級の友人たち、名高い家柄の客人たちなど、山のような著名人たちだった。アサバスカ州のこのあたりは、恵み深い気候のおかげで、四季折々の景色が美しく、濃厚なバターにハエがたかるように、暇をもてあましている貴族を惹きつけるのだった。

エステートが出来る前に町が存在していたのか、あるいはその逆なのかは、さだかではない。しかし、町の繁栄は、確かにエステートによるものだった。ウィリアムズ・フォードには、基本的に三つの階級が存在していた。土地所有者、あるいは貴族。その下に平民【借地人】。彼らは、鍛冶屋、大工、酒屋、監督員、植木屋、養蜂家などで、働く代わりに土地賃貸料が免除されている。そして最後に契約労働者。畑仕事をし、パイン川の西岸に立ち並ぶ粗末な小屋に住み、粗悪な食べ物と住居以外、何の報酬も与えられていなかった。

ぼくの家は、この階級制度において、あいまいな位置にいた。母さんは、裁縫師だった。祖父母がそうしていたように、エステートで働いていた。しかし、父さんは、ウィリアムズ・フォードに、契約労働者としてやってきて、母さんと結婚したときに、それが問題になった。「平民階級と結婚した」といわれ、持参金の代わりに、エステートの厩舎で馬手として雇われることになった。法律ではそういった結婚を認めていたが、世間の人々は眉をひそめた。母方の親族が死んで以来（おそらく、恥ずかしさのあまりに）、自分たちと同じ階級の知り合いはほとんどいなくなり、ぼくは小さいころ、父さんの身分の低さゆえに、よく無視されたり、ばかにされたりした。

それに加えて、宗教の問題があった。ぼくの家は——父さんがそうだったために——チャーチ・オブ・サインに属していた。当時、アメリカのすべてのキリスト教会は、イエス・キリスト教団ドミニオン管理委員会から正式な承認を受けなければいけなかった。(一般的に〈ドミニオン教会〉と呼ばれるものだが、それは誤った呼称だ。教会はすべて、委員会に認められれば、ドミニオン教会となるから。ドミニオン聖公会、ドミニオン長老会、ドミニオン・バプテスト教会——アメリカ・カトリック教会でさえ、二一二年にローマ法王への忠誠を破棄して以来——すべてが、ドミニオンの傘下に置かれることになった。ドミニオン教会の目的は、教会として存在するのではなく、教会を認定することにあった。アメリカでは、憲法のもと、自分たちの望む教会で礼拝する自由が与えられている。その教会が、正真正銘のキリスト教の集会で、いかさまや、悪魔教のような宗派でないかぎり、委員会はそれを区別するために存在し、また、その重要な任務を推進するため、手数料や十分の一税を集めていた。)

ぼくたちは、先にいったように、チャーチ・オブ・サインに属していた。末端の宗派で、平民階級からは敬遠され、ドミニオン教会は、その存在を認めてはいたものの、全面的に承認していたわけではなかった。信者の大部分は、読み書きの出来ない契約労働者たちで、父さんもそういった環境で育ったうちの一人だった。ぼくたちの教会は、主テキストを、マルコの一節としていた。「彼らはわたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語る。手で蛇をつかみ、また、毒を飲んでも害を受けない」言い換えれば、ぼくたちは、蛇使いだった。小さな宗派であったにもかかわらず、そのせいで、ぼくたちの教会は有名だった。信徒には農場労働者が多く、ほとんどが最近南部の州からやってきた契約労働者だった。父さんがその教会の助祭(そういういい方は教会ではしなかったけれど)だったので、ぼくたちは、家の離れの隣の畑に金網のおりを置き、儀式に使うための蛇を飼っていた。この慣習がぼくたちの社会的地位の向上に貢献することはほとんどなかった。

ジュリアン・コムストックがダンカン&クラウリー一族の招待客として、教育係のサム・ゴドウィンとともにやってきて、ジュリアンとぼくが狩猟中に偶然出会ったとき、ぼくの家族の立場はそのようなものだった。

当時、父さんは、エステートの広くて豪華な厩舎の監督官の地位に昇進していて、ぼくはその父さんに弟子入りしていた。父さんは動物、特に馬が好きだった。残念ながら、ぼくは同じ気質を引き継いでいないので、厩舎にいる馬という住人との関係は、互いの存在を我慢しあう以上にはなっていなかった。ぼくはその仕事を好きになれなかった——寝わらの掃除とか、糞の始末とか、おおむね、年配の厩務員たちがいやがるような雑用が主だった——だから、一族の執事が(もしくは、サム・ゴドウィン自身が)、ジュリアンの要請で、ぼくを呼び出すようになり、日常的に仕事から離れるようになったとき、ぼくは喜んだ。(ぼくが独裁的な厩舎の社会から抜け出すのを、飼育係や馬具係がいくら歯ぎしりして怒っても、その要請はコムストック家の者から出されていたので、拒むことはできなかった。)

初めのころ、ジュリアンとぼくは本を読んでそれについて語り合ったり、狩りに出かけたりした。その後、サム・ゴドウィンの招きで、ぼくもジュリアンの授業に参加するようになった。彼はジュリ

アンの教育だけでなく生活全般の面倒もまかされていた。(ぼくは、ドミニオン教会の学校で、初歩的な読み書きを習い、母さんの指導のもと、それらの技能を磨いた。母さんは、読み書きの能力が社会的地位の向上につながると信じていた。父さんは読み書きができなかったから。)そして、ある晩、ジュリアンとぼくが最初に出会ってから一年もたたないうちに、サム・ゴドウィンがぼくの家に来てきて、両親に対して驚くべき申し出をした。

「ハザードさん」とサムは切り出し、帽子に触ろうと手を挙げた。(サムは、家に入ってくるときにすでに帽子を脱いでいたので、その動作は敬礼のようにみえた。)
「あなた方の息子さんとジュリアン・コムストックの仲については、もちろんご存知ですか？」

「ええ」と母さんが答えた。「いつも心配しています——エステートはああいうところなので」

母さんは、小柄で、ぼつりとした体をしていて、自分の考えをもっていて、はっきりものをいった。父さんはめったに話をせず、そのときはまったく口を開かなかった。ただ椅子に座って、月桂樹の根で作ったパイプを口にくわえていたが、それには火がついていなかった。

「エステートの状況、それがまさに問題の核心です」サム・ゴドウィンがいった。「そのことについて、アダムがどれだけあなた方に話しているかわかりませんが、ジュリアンの父親、ブライス・コムストック将軍は、わたしの友人であり、指揮官でもありました。彼が亡くなる直前、わたしはジュリアンの世話と幸せを託されました——」

「亡くなる前」と母さんはいった。「反逆罪で、絞首台に登ったという」

サムは顔をくもらせた。「その通りです、ハザード夫人。それは否定しませんが、裁判はあらかじめ仕組まれたもので、判決に対して弁護の余地がなかったというのが、わたしの意見です。しかし、弁護できたにしろ、できなかったにしろ、彼の息子に対してのわたしの責務が変わるわけではありません。わたしは少年の世話をすると約束したんです、ハザード夫人。そして、その約束を守るつもりです」

「キリスト教の精神ですね」母さんの疑念が完全には晴れていないことがうかがえた。

「エステートについて、あなたがおっしゃったこと、それからあそこの若い後継者たちの振る舞いについてですが、同感いたします。それこそが、ジュリアンがあなたの息子さんとつきあうことにわたしが賛成し、それを奨励している理由なのです。アダムを別にして、ジュリアンには本当の友だちがいません。エステートは毒蛇のねぐらです——ああ、お気を悪くされないうう」ぼくたちが信仰している宗教のことを思い出して、サムはそうつけ加えた。一般的に、チャーチ・オブ・サインの信者は必ず蛇が好きか、あるいは蛇に対して何らかのきずなを感じていると思われていたけれど、サムもそのような誤解をしたのだった——「どうか悪く思わないでください。ジュリアンが、その、むしろサソリとかかわる方がいいんです」サムは、差し支えない比喻で説明し直そうとした。「軽蔑、陰謀、策略といった彼の同輩たちの腐った悪習に身を染めるよりも。こういう理由で、わたしは、彼の教育係であるだけでなく、常に友人となることを求められます。しかし、わたしは彼のほぼ三倍も年上なので、ハザード夫人。彼には年相応の、信頼できる友人が必要なのです」

「具体的に何をおっしゃりたいんですか、ゴドウィンさん？」

「わたしはアダムを第二の、そして正規の生徒として、迎えたいのです。最終的に二人のためになるでしょう」

サムは普段は口数が少なかったが——教師としてもそうだった——この演説をして、まるで重量挙げをしたかのようにひどく疲れたようだった。

「生徒とおっしゃいますが、いったい何の生徒ですか、ゴドウィンさん？」

「力学。歴史。文法に作文。武術——」

「アダムはすでに射撃の方法を知っています」

「ピストルの使い方、サーベルの使い方、素手の殴り合いの仕方——しかし、これはほんの一部です」サムは急いでつけ足した。「ジュリアンの父親に、少年の反射神経のみならず、心を養うようにいわれたのです」

母さんは、そのことについてもっといいたいことがあった。それは、もっぱら、ぼくの厩舎の仕事が借地料の一部の埋め合わせになっていて、その分のエステート発行の交換券なしでは生活していけないということだった。しかし、サムはそれを想定していた。彼はジュリアンの母親——つまり、大統領の義理の姉——から、ジュリアンの教育費として、自由に使える金を委託されていた。その金で、ぼくの厩舎の仕事分を補えるという。それも、かなりいい額で。サムは金額を提示し、両親の反対はさらに小さくなり、ついに、それはなくなった。(ぼくは一部始終を隣の部屋のドアのすき間から見ていた。)

不安がなかったわけではない。次の日、ぼくがエステートに向かおうとしたとき、つまり、今度は厩舎ではなく大邸宅のひとつを訪れるというとき、母さんはぼくに、貴族とあまり深い関わりをもたないよう注意した。ぼくは、キリスト教の善行に従うと約束した。(安請け合いで、想像していたよりも守るのは簡単ではなかった。[ジュリアンは、そのいくぶん女性的な性質のせいで、ほかの若い貴族たちのあいだに男色家だという評判を獲得していた。証拠がないのにそう信じられたのは、階級としての彼らの思考の傾向への証明でもあった。しかしそれがぼくの利益となって返ってくることもあった。複数の場面で、彼の女性の知人が——ぼくと同年齢か年長の洗練された少女たちが——このぼくが、肉体的な意味で、ジュリアンの親密な連れであると考えた。そこで彼女たちは、もっとも直接的なやりかたで、ぼくの異常な習慣を治療しようとするのだった。ぼくはそのような治療に協力するのが大好きで、彼女たちは常に、それに成功するのだった。])

「危険にさらされるのは、あなたの道徳観ではないかもしれないわ」と母さんはいった。「上流階級の人たちは、わたしたちとは違う基準で、物事を行うのよ、アダム。彼らが行うゲームには、命が関わっているわ。ジュリアンのお父さんが絞首刑になったのは知っているわね？」

ジュリアンは決して口にはしなかったが、それは誰もが知っていることだった。ぼくはブライス・コムストックが無実だったというサムの主張を繰り返した。

「そうかもしれない。それが重要なよ。これまで三十年の間、コムストック家は大統領の座について、現在のコムストックは、ジュリアンの父親の権力をねたんでいたといわれているわ。ジュリアンの叔父の政権にとって、唯一の脅威は、自分の兄の支配力だったから。彼の兄はブラジルとの戦

争で、大衆から圧倒的な信望を得たから。ゴドウィンさんは正しいことをしていると思うわ。ブライス・コムストックが絞首刑にさせられたのは、彼がひどい将軍だったからではなく、成功者だったからでしょうね]

ニューヨークでそういったスキャンダルが起きるのはわかる——ニューヨークには大統領が住んでいるからだ。そこで生活について、犬儒学派ですら身の毛をよだてるような、恐ろしい話を聞いたことがある。でも、そういったことがいたいほくにどう関係があるというんだらう？ ジュリアンにとっても？ ぼくたちはまだ少年なのに。

ぼくの認識は甘かった。

4.

日が次第に短くなり、感謝祭がやってきて、過ぎていった。十一月が足早に去っていくと、空中に雪が漂い始め——ともかく、雪の匂いがした——アサバスカ予備役の騎兵五十人が、同じくらいの数の選挙運動員と世論調査員を護衛して、ウィリアムズ・フォードにやってきた。

多くの人たちがアサバスカの冬を嫌っていたが、ぼくは違う。寒いとか、暗いのは気にならなかった。無煙炭の暖房と、長い夜に読書をするためのアルコールランプがあつて、朝食にパンケーキとヘッドチーズが食べられるんだつたら。それに、まもなくクリスマスがやってくる——ドミニオン教会が認めている四つのキリスト教祝日のひとつだ（他は、復活祭、独立記念日、そして感謝祭だった）。ぼくの一番のお気に入りにはクリスマスだった。プレゼントがもらえるからというわけではなかった。たいていわずかなものだったから——でも去年は、両親から家にあつたマズルローダーライフルをもらい、それがとても自慢だった——また、祝日の宗教的要素が好きなわけでもなかった。そういったものは、恥ずかしい話だが、礼拝で無理やり自分に押しつけるとき以外は、めったに心の中に入つてこなかった。ぼくが好きだったのは、すがすがしい空気、霜で白くなった朝、戸口に留められた松やヒイラギのリース、目抜き通りに掲げられて、冷たい風に元気よくはためいている、鮮やかな赤い横断幕、そしてクリスマスキャロルや賛美歌の歌声といったものが合わさつてもし出す雰囲気——そして、挑戦が半分、服従が半分の、息もつけられないほどの冬との大いなる対決だった。ぼくは、こういう行事の規則正しさが好きだった。まるで、時間という歯車の歯がぴったりとかみ合っているようだった。それは、心を静めてくれた。永遠を語るものだった。

しかし、その年は、不吉な季節を迎えていた。

予備役が十二月十五日に町に乗り込んできたのだ。表向きは、大統領選挙を行うためだった。ウィリアムズ・フォードでは、国政選挙は形式でしかなかった。市民が投票し終えるまでには、たいてい結果がわかっていた。人口の多い東部の州ですでに決まっていたからだ——候補者が一人以上いれば別だったが、そういう場合は、ほとんどなかった。過去六回の選挙では、個人も政党も誰も対抗馬を出すことなく、三十年間、コムストック一族の誰かによる支配がつづいた。選挙は、満場一致と同義語になっていた。

でも、それはそれでかまわなかった。選挙はいまだにとても重要な行事で、ほとんどサーカスのようなものだった。世論調査員や選挙運動員たちがやってきて、いつも何か面白いものを見せてくれた。

そして今年は——エステートの執務室からうわさが流れ、あちこちでささやかれるようになったのだが——ドミニオン教会のホールで映画が上映されるということだった。

ぼくは映画を観たことがなかった。ジュリアンが説明してくれたことはあったけれど。彼は小さいころ、よくニューヨークで観たという。ジュリアンが昔のことを懐かしむとき——ウィリアムズ・フォードでの生活は、ジュリアンにとって、ときにはちょっと静かすぎた——いつも映画のことを話すのだった。そういうわけで、選挙の一環として、映画を上映することが告げられたとき、ぼくたちは胸を躍らせ、時間を決めて、ドミニオン教会のホールの裏で落ち合うことにした。

ぼくたちは二人とも、そこに行く正当な理由がなかった。投票するには若すぎたし、ジュリアンは、平民階級の集会にいる唯一の貴族として、目立ってしまって、おそらく歓迎されないだろう。(上流階級のものたちは、エステートで別に投票していて、契約労働者の代理としてもすでに投票を終えていた。)それで、ぼくは、夕方早く両親をホールに送り出し、その後こっそりと出かけ、映画が始まる間に到着した。ホールの裏には十数頭の馬が繋がられていて、そこで待っていると、ジュリアンがエステートの厩舎から借りた馬に乗って現れた。彼は平民の服にできるだけ似たものを身につけていた。大麻製のシャツに黒っぽいスボン。黒いフェルトの帽子のつばをさげて、顔を隠していた。

ジュリアンが馬から降りて、不安そうな顔をしたので、ぼくはどうしたのかと訊ねた。彼は首を振った。「何でもないよ、アダム——というか、まだ、何も起きてない——でもサムが面倒なことが起きそうだといっていた」残念だといいたげに、彼はぼくを見つめた。「戦争だ」と彼はいった。

「戦争ならいつだってしているじゃないか」

「新たな攻撃だ」

「それが何なんだい？ ラブラドルからはかなり離れているよ」

「明らかだ、きみの地理感覚は、サムの授業を受けてもよくなってないな。それに、物理的には前線から離れていたとしても、戦略的に見ると、安心するには近すぎるんだ」

それがどういう意味なのかわからなかったので、その問題はいったん置いておくことにした。「映画が終わったあとで心配しようよ、ジュリアン」

彼は無理に笑っていった。「ああ、そうだね。後でも先でも一緒だ」

そして、ぼくたちは、照明が落とされたとたん、ドミニオン教会のホールに入り込んだ。身をかがめて、込み合った信者席の最後尾に滑り込み、映画が始まるのを待った。

ホールの前面には広い舞台があつて、宗教関係の道具はすべて移され、四角い白いスクリーンが、普段は説教壇や演壇が置かれていた場所に組み立てられていた。スクリーンの両脇にはテントのようなものがあつて、その中に二人の弁士が座り、手には台本、傍らには小道具——拡声器、ベル、角材、太鼓、おもちゃの笛——を置いていた。ジュリアンがいうには、ニューヨークの流行りの映画館で観られるものを、ここでは必要最低限のものだけを使って行うのだという。都市では、もっとスクリーン(そして、そこに映し出される映像)が大きく、弁士も一流でもっと技量があるらしい。台本を読

むことと、音を立てることは、流行の先端を行く芸術と見なされているので、都市の弁士たちは役を得るために、互いに競い合っている。ドラマチックなナレーションや、さらなる「効果音」を挿入するために、スクリーンの後ろに三番目の弁士がいる場合もあるという。場合によっては、オーケストラがつくこともあって、個々の作品に合わせてテーマ音楽が奏でられるらしい。

映画には二人の主人公——男性と女性——が登場し、それぞれの声を弁士が演じる。会話のシーンでは、男優は左側、女優は右側に映るように撮影されていて、弁士たちは鏡を使って画面を見ながら、ビナクルランプ（観衆の注意をそらすような光を投げかけないように）のようなもので照らされた台本を目で追う。映っている俳優たちがしゃべると、弁士たちもそのせりふをしゃべるので、スクリーンから声が聞こえるように感じられる。同じように、太鼓やベルの音なども、映画の進行に対応していく。[演奏者たちが専門家するとき、幻想はじつに衝撃的だが、彼らのささいな過ちもおなじように驚くべきものらしい。ジュリアンはあるときニューヨークの映画版のウィリアム・シェイクスピアの『ハムレット』のことを詳しく話してくれた。そこでは演奏者は酔っ払って劇場にやってきて、不幸なデンマーク人を「限りない心配よ——（印刷できない悪態）——私はすでに自分の心配を抱えている」と、もっと多くのわいせつ語と、たくさんの不適切なベルの音や下品な口笛とともに語ったので、とうとう代役が大急ぎで立てられたという。]

「もちろん、世俗的な時代のものの方がもっとよかった」とジュリアンがささやいた。誰もこの不適切な発言を聞きつけていなければいいがとぼくは祈った。どこで聞いても、石油全盛期の映画は本当に素晴らしいということだった——音は録音されていて、白黒ではなく、カラーが使われていたなど。しかし、それはまた（同じく、どこで聞いても）恐ろしく不信心で、極端なまでに冒瀆的で、決まってわいせつな内容だったらしい。幸いなことに（あるいは、ジュリアンの観点からすると、残念なことに）作品はひとつも残っていなかった。記録されたメディアの寿命は短かった。保存されていたフィルムはずっと前に腐食し、デジタル式の複製品は劣化し、全く解読できない状態だった。こういった映画は二十世紀と二十一世紀前半のものだ——持続不可能と知りながら、ひたすらら快樂を追い求めた繁栄の時代。地球に埋蔵されていた枯渇しうる石油を燃やして、全盛を極めたその時代は、ついに偽の審判の時代を迎え、戦争、疫病、そして膨れあがった人口を適切な数まで減少させる苦しみを生むことになった。

アメリカの過去の時代で、本当の意味で一番よかったのは、『ユニオンのドミニオン教会の歴史』によると、十九世紀だという。当時の家庭における美德と適度な産業形態は、ぼくたちがやむを得ず、不完全ながらも復活させようとしているものだったし、当時の技能は実用的で、文学も、多くの場合、ためになるものだった。

けれども、ジュリアンの背教のいくつかに影響を受けたことは、認めざるをえない。燭台の火が消されて、ベン・クリール（ドミニオン教会の代表者で、映画のスクリーンの前に立っている）が、国家、忠誠、義務について短い説教をしているとき、ぼくは不幸な考えに心を乱されていた。戦争、とジュリアンはいっていた。それはラブラドルで絶え間なくつづいている戦争だけでなく、その骸骨のような細い手をまっすぐウィリアムズ・フォードに伸ばそうとしている新たな局面を意味していた――

—そうしたら、ぼくや、ぼくの家族はどうなるんだろう？

「われわれはここに投票するために集まりました」ベン・クリールは、最後にこういった。「それは、われわれの国家であり信仰でもあるものに対する神聖な義務です。われわれの国家は、デクラン・コムストック大統領という慈愛に満ちた指導者によって、巧みに舵取りされてきました。大統領選挙の運動員——手の動きからわかります——は今夜の予定をどんどん進めたがっています。それでは、話はこれくらいにして、彼らが用意した今夜のお楽しみ、映画『天の下で最初の』をご覧ください——」

上映に必要な機材は 帆布張りの荷馬車でウィリアムズ・フォードに運ばれてきていた。それらは、映写機や携帯型のスイス製発電機（おそらくラブラドルでオランダ軍から奪い取ったものだろう）といったもので、発電機は蒸留酒を動力にし、音を遮断するために、教会の裏手に深い溝か隠れ家のようなものを掘って、その中に据えつけられていた。それでもなお、音は、大型犬のうなり声のように、板張りの床を伝わってきた。この振動はむしろ上映の瞬間を意識させただけで、最後の照明の炎が消えると、巨大な黒い機械式映写機の電球がパッとついた。

映画が始まった。初めて見るものだったので、ぼくはただただ驚いた。写真の幻影が迫ってくるのにすっかり魅せられ、内容はほとんどわからなくなってしまった……でも、飾り立てた題目の文字とケベックの第二の戦いの場面は覚えていた。戦いは俳優が再現していたが、ぼくにとっては完全に現実の世界だった。太鼓が激しく打ち鳴らされ、小さな縦笛が甲高い音を立て、発砲や砲撃の大音響を表す。ホールの前列に座っているものたちは無意識のうち、縮みあがっていた。町で名の知られた女性たちは失神しそうになり、連れの男性の手や腕にすがりついた。その男性たちも、まるで自分たちが戦闘に参加したかのように、傷つき、悲嘆にくれていたかもしれない。

けれども、まもなく、オランダ人たちが十字架と月桂樹が描かれた国旗の下で、アメリカ軍から撤退し始めた。若いデクラン・コムストック役の俳優がクローズアップされ、就任の誓いを読み上げた（ちょっと省略されていたが、芸術のために、ここでは歴史が編集されていた）——それは、彼が大陸緊急令と過去に対する負債の両方について話した演説だった。彼の声はもちろん弁士の一人が演じていて、バツソ・プロフォンドの重々しく、低い声が拡声器から流れていた。（それも事実がちょっと変えられていたところだ。デクラン・コムストックは、甲高い声をしていて、かんしゃくを起こしやすい人物だったのだ。）

それから映画は、征服者デクラン政権の偉業にまつわる威厳あるエピソードを語り、美しい景色を映し出した。デクランは、ローレンシア軍で知らないものではなく、ニューヨークで支配的立場をとるまでになる。場面は、ワシントンDCの再建（湿地帯の風土と昆虫が媒介する感染症のため、その事業は決して完了することなく、常に進行中だった）になる。その後は、マンハッタンのイルミネーション。そこでは、午後六時から十時まで、毎日四時間、水力発電による発電機で、街路灯が灯されている。それから、ボストン港の軍造船所、ペンシルバニアの炭坑や鑄造所や武器工場、そして、きらきらと輝く最新の蒸気機関車がこれまたきらきらと輝く最新型の列車を引っぱっている場面などが次々と映し出された。

こういったものすべてをジュリアンはどう思っているのだろうか？ 映画全体は、つまるところ、

ジュリアンの父親を絞首刑にかけた男の美德を称えるために作られたものだった。ぼくは忘れることができなかった——そしてジュリアンもいつも意識していたに違いない——現大統領が自分の兄を殺した暴君だということ。しかし、ジュリアンはスクリーンにくぎづけになっていた。それは（後からわかったことだけど）現代政治に対するジュリアンの考えではなく、彼が好んでそう呼ぶ「シネマ」に惹かれる気持ちを表していた。二次元の空間に幻想を描くというのが、ジュリアンの心から離れることはなかった——それは、彼の「天職」といってもよかった。後日、ジュリアンは、傑作映画「偉大なる博物学者チャールズ・ダーウィンの生涯と冒険」を制作することになる……しかし、その話はまたの機会にしよう。

映画はつづいて、征服者デクランの時代に、パナマでのブラジル人に対する襲撃が成功したことについて触れたが、ジュリアンが一度か二度顔をしかめていたから、それはもっと正鵠を射ていたのかもしれない。

ぼくといえば……映画に没頭しようとしていたが、集中力がひどく欠けていた。

もうすぐクリスマスだというときに催された、この奇妙な選挙運動のイベントのせいかもしれない。ティップに行って以来、ほとんど毎晩、ベッドで一、二ページずつ読んでいる『宇宙における人類の歴史』のせいかもしれない。原因が何であれ、ぼくは突然、不安に襲われ、憂鬱な気分になった。ぼくは今、すべてが身近で、居心地よく感じられるものの中にいる——平民階級の群衆、善意にあふれたドミニオン教会のホール、クリスマスの垂れ幕や記念品——そのすべてが突然、はかないもののように思われた。まるで世界がバケツで、その底が抜けてしまったかのようだった。

これが、ジュリアンのいう「哲学者の物の見方」なのかもしれない。もし、そうだったら、どうやって哲学者たちは、その考えに耐えているのだろうか。ぼくはサムから少し——そしてジュリアンからはもっと学んだ。ジュリアンはサムが認めていない本でさえも読んでいた——宗教心の薄れた世俗的な時代の信憑性のない考えについてのものだ。ぼくはアインシュタインのことを思い出した。いかなる視点も、他の視点より優先すべき理由はないという彼の学説、つまり、一般相対性理論と、「何が本当か？」という質問に対する答えは、「どの立場に立ってものを見ているのか？」という質問から始まるという主張について。ここウィリアムズ・フォードという繭の中にいるぼくは——ひとつの視点にすぎないのだろうか？ それとも、ぼくはDNAの分子が肉体化したもので、ジュリアンがいったように、類人猿、魚、そしてアメーバを不完全に記憶しているのだろうか？

ベン・クリールが手放して褒めたたえている国家でさえ、自然の趨勢のうちのひとつの例でしかないのかもしれない——別の世紀の不完全な記憶、それ自体がその前につづいていた世紀の不完全な記憶であり、それが人類のあけぼのまでさかのぼるのだ（エデンに、あるいはジュリアンが信じているように、アフリカまで）。

これはただぼくが、自分が育った町の幻想から目覚めただけなのかもしれないし——あるいは、自分から町が奪い取られるかもしれないといった予感から来ていたのかもしれない。

映画は感動的な場面で終わった。アメリカの旗、その十三本の条と六十個の星が、太陽に照らされ

て、さざ波のようにたなびいた。それは征服者デクラン政権による、つづく四年間の繁栄と善行を予示していると、ナレーターは力強く語った。対立候補がいるとか、そういううわさがあるわけではなかったが、観客はデクランに投票することを求められていた。フィルムがリールで空回りし、電球が消えた。そして、ドミニオン教会の助祭たちが壁の明かりをつけ始めた。観客の男たちの何人かが、映画の上映中、パイプを吸っていたので、その煙が燭台から立つ煙と混ざり、青灰色の雷雲となって、高いアーチ天井に立ちこめていた。

ジュリアンは帽子を深くかぶったまま、信者席に寄りかかり、何か気に取られていた。「アダム」と彼は小声でいった。「ここから出る方法を見つけないといけない」

「ひとつあると思うよ」とぼくはいった。「ドアというものだ——でも、何を急いでいるんだ？」

「ドアをよく見てみる。予備役が二人配備されている」

見てみると、それは本当だった。「でも投票の警備でいるだけじゃないのかい？」ベン・クリールが再び舞台上に現れ、正式な挙手投票を行う準備をしていたからだ。

「膀胱に病気を持っている床屋のトム・シャーネイが、屋外の便所に行こうとしたんだ。でも追い返されたよ」

確かに、トム・シャーネイはぼくたちから一メートルも離れていないところに座っていた。不満そうに身をくねらせて、腹立たしげに予備役を睨んでいる。

「でも、投票の後なら——」

「目的は、投票じゃない。徴兵だ」

「徴兵！」

「しっ！」ジュリアンが慌てていった。青白い顔の周りの髪の毛が揺れた。「みんな驚いて逃げ出すぞ。こんなに早く始まるとは思っていなかった……でも、ラブラドルの敗北と新しい部隊の動員を知らせる電報がニューヨークから届いていた。投票が終わり次第、運動員たちは徴兵令を発表し、居合わせているものすべての名前と、彼らの子供の名前と年齢を調べるだろう」

「徴兵されるには、ぼくたちは若すぎるんじゃないか？」とぼくはいった。二人ともまだ十七歳だった。

「聞いたところでは、そうじゃない。規定が変わったんだ。ああ、選考が始まったら、きみはなんとか身を潜めて——免れることができるかもしれない。ぼくたちがどこからも遠いところにいることを考えるとね。でも、ここにぼくがいることは、知れ渡っている。ぼくには紛れ込める集団や家族がない。実のところ、ウィリアムズ・フォードのような小さな町にあんなに多くの予備役が送り込まれたのは、偶然じゃないだろう」

「偶然じゃない、ってどういうこと？」

「叔父はぼくの存在をずっと気に入らなかった。叔父には子供がいない。後継者がいない。ぼくが大統領の地位を奪う可能性があると思っているんだ」

「ばかばかしい。きみは大統領になんかなりたくない——そうだろう？」

「そんなことをするくらいなら、銃で自殺するよ。でも叔父のデクランは、ねたみ深くて、ぼくを守

ろうとする母さんの動機を疑っている」

「徴兵は、彼にとって何の役に立つんだい？」

「徴兵自体は、ぼくだけに向けられたものじゃないけど、叔父にとっては、有効な手段となるに違いない。ぼくが召集されたら、自分たちの家族だけ兵役を免除していると、文句をいわれることはない。ぼくが歩兵隊に入ったら、ラブラドルの前線に行くように仕組まれるだろう——そこで、ぼくは戦死させられるんだ」

「でも——ジュリアン！ サムがきみの身を守ってくれるんじゃない？」

「サムは退役軍人だ。ぼくの母さんの後ろ盾の他には、何の力もない。母さんの後ろ盾だって、今はたいして役に立たない。アダム、この建物に他の出口はないかい？」

「ドアだけだ。あそこのステンドグラスを割るといふのなら別だけど」

「じゃあ、どこか隠れる場所は？」

ぼくは考えた。「あるかも」といった。「舞台の裏に宗教行事に使う備品を保管している部屋がある。舞台の袖から入れるようになってる。そこに隠れることはできる。でも、ドアはついてないよ」

「それは、しかたない。人目を引かずにそこに行けるなら」

でも、それはそんなに難しいことではなかった。燭台はまだすべてが灯されていたわけではなく、ホールのほとんどは暗かった。運動員たちが、つづく投票を記録する準備をしている間——最終集計の結果が目に見えていて、征服者デクランの就任式のための舞踏場がすでに予約されていたとしても、彼らは、細部まで正確であろうとした——観客はうろうろしたり、伸びをしたりしていた。ジュリアンとぼくは、急いでいるそぶりを見せずに、陰から陰へとそろそろ移動し、舞台のそばまでやってきた。収納室の入り口で足を止め、ぼくたちに目を付けていたのろくさい予備役が、映写機を取りはずすように、上官に呼び出つけられるまで、そこで待っていた。それから、カーテンがかけられている出入り口から、ほとんど真っ暗な闇の中へ身をかがめて滑り込んだ。ジュリアンが何かにつまずき（教会のタックピアノの一部分で、ピアノは二一六五年にクリーニングのために分解されたが、担当していた巡業調律師が、仕事を終える前に発作で亡くなって、そのままになっていたのだ）、ドンと木にぶつかるような音をたてた。教会中の人々が気づくのではないかというくらい大きな音のように思われたが、どうやらそうではなかったようだ。

わずかな光がガラス張りの高窓から差し込んでいた。窓には蝶番がついていて、夏に換気をするため、開閉できるようになっていた。薄暗い明かりだった。その晩は曇っていて、表通りの街灯だけが明るく輝いていた。目が暗さに慣れると、あたりがはっきりと見えるようになった。「あそこから逃げ出せるかもしれない」とジュリアンがいった。

「はしごがないとだめだよ。でも——」

「何だ？ はっきりいうんだ、アダム。考えがあるのなら」

「ここは、舞台に置く高台をしまっておくところだ——聖歌隊が合唱する際に、段々になって立つ長い木の台だよ。それならたぶん——」

ジュリアンはすでに収納室にあるおぼろげな物体を調べ始めていた。ティップで一心に古い書物を

探していたときのようなだった。ぼくたちはそれらしきものを見つけ、それほど音をたてずに、適当な高さまでそれらを積み上げることができた。(教会のホールでは、すでに運動員たちが満場一致でデ克蘭・コムストックが選出されたことを記録し、徴兵についての知らせを発表し始めたところだった。会場では、無駄と知りつつも反対する声があがり、ベン・クリールが声を張り上げて、落ち着かせようとしていた——ぼくたちが使われていない備品を動かしているのを耳にしたものはいなかった。)

窓は少なくとも三メートルの高さのところにあって、ぎりぎり通り抜けられるかというくらい狭かった。反対側に体を出すと、指先でぶら下がらなくてはならず、それから地面に向かって飛びおりにしなければならなかった。着地の際、ぼくは右足首を不自然にひねってしまった。でも、後に残るような怪我ではなかった。

その晩は、すでに寒かったのだけれど、一段と冷え込んでいた。ぼくたちが出た場所は、馬をつないでいた杭の近くだった。ぼくたちの突然の出現に馬がいななき、広がった鼻孔から熱い息を吐き出した。ちりのような細かい雪が降り始めている。それほど風はなかったけれど、クリスマスの横断幕が冷たい空気の中で弱々しく揺れていた。

ジュリアンはまっすぐに自分の馬まで行き、杭から手綱をほどいた。「これからどうするんだい？」とぼくは訊いた。

「アダム、きみは、可能なかぎり、自分の身を守ることだけ考えるんだ。ぼくは——」

しかし、ジュリアンは自分の計画を話すのをためらった。彼の顔に不安の影が走った。貴族界で、何か急速に展開している。でもぼくにはほとんどわからないことだった。

「ほとぼりが冷めるまで、待っていようよ」とぼくは、ちょっと焦っていった。「予備役はウィリアムズ・フォードにずっといるわけじゃない」

「そうだ。でも、残念ながら、ぼくもそうだ。征服者デ克蘭は、どこに行けばぼくを見つけられるか知っている。そして、チェスでとった駒のように、政治ゲームからぼくを取り除くんだ」

「でも、どこに行こうっていうんだい？ そして何を——」

ジュリアンは唇に指を当てた。ドミニオン教会のホールの正面から、騒がしい音が聞こえてきた。ドアが開け放たれ、集まっていた人々が、徴兵の知らせに、言い争ったり、嘆き悲しんだりする声をした。「一緒に来るんだ」とジュリアンがいった。「さあ、早く！」

ぼくたちは表通りではなく、鍛冶屋の物置の裏に通じる道を進み、北にあるエステートの方向へ、木々に覆われたパイン川の川縁を歩いていった。その晩は暗く、馬はゆっくりと進んでいったが、ほとんど本能的に道を知っていた。薄く降る雪のすき間から、町の明かりがまだちらほらと見えている。雪は、何百本もの冷たい小さな指のように、ぼくの顔を撫でかすっていた。

「ずっとウィリアムズ・フォードにいるなど、できないことだ」ジュリアンがいった。「わかっているべきだったよ、アダム」

全くその通りだった。それは、ジュリアンが常に考えていたテーマだからだ。ものの非永久性のことだ。ぼくはいつもそれが、彼の幼年時代の出来事、彼の父親の死、母親との離別、親身であるけれ

ど、自分とは隔たりのある教育係サム・ゴドウィンのことから来ているのだと思っていた。

一方で、ぼくは、どうしてもまた『宇宙における人類の歴史』とその中の写真のことを考えてしまう——月に降り立った最初の人類であるアメリカ人のことではなく、最後に天球を訪れたもののことだ。それは、中国人たちで、彼らの宇宙服は爆竹と同じ赤い色をしていた。アメリカ人たちのように、彼らもまた自分たちの国旗をしっかりと月面に立てた。訪問者がつづくと思っていたのだ。しかし、石油時代の終わりと偽りの審判の時代がやってきて、そういった計画は失敗に終わった。

そして、ぼくは、機械が撮影し（あるいは、本がそう断言している）、いまだ人類が足を踏み入っていない、さらに孤独な火星の平原についても思いを巡らせた。宇宙は寂しい場所に満ち満ちている。どういふわけか、ぼくはそのうちのひとつに巡り合った。雪は降りやんだ。雲の間から無人の月が現れ、ウィリアムズ・フォードの冬の野原が、神秘的に輝いた。

「ここを離れなければいけないのなら」とぼくはいった。「ぼくも一緒に行く」

「だめだ」ジュリアンは却座にいった。彼は、寒さを防ぐため、帽子を耳のところまで下ろしていたので、あまり顔が見えなかった。ぼくの方をちらりと見たとき、その目が光った。「ありがとう、アダム。そうできたらいいんだけど。でもできないんだ。きみはここにいなくちゃいけない。そして、できたら徴兵を逃れろ。文才を磨いて、いつか本を書くん。チャールズ・カーティス・イーストンみたいに」

それは、昨年膨らんできた希望で、ぼくたち二人の読書好きと、自分の思わぬ才能を発見することになった、サム・ゴドウィンの作文指導によって生まれたものだった。[もちろんそれは最初から完全な才能だったわけではない。ぼくがサム・ゴドウィンに『ウエスタン・ボーイ：敵地ヨーロッパでの冒険』という最初の小説を贈ったのは、ほんの二年前のことだ。サムはその文体と野心を褒めてくれたが、たくさんの欠点も指摘してくれた。たとえば、象はブリュッセル固有の生き物ではなく、ふつう非常に大きなからだをしているから、アメリカ人の少年には地面に組み伏せることはできないとか、ロンドンからローマへの旅は、たとえ「非常に速い馬」にまたがっても、数時間で行けるものではないとか——ぼくが途方もなく恥ずかしくなって部屋に逃げ込んでいなければ、サムはこの調子でいくらでもつづけていたかもしれない。] 今のところ、それははかない夢だった。他のすべての夢と同じように、束の間のものであった。人生に似ている。「そんなことどうでもいいよ」とぼくはいった。

「それがきみの間違っているところだ」ジュリアンがいった。「何も残らないからといって、どうでもいいわけじゃない。そんなふうに思っちゃだめだ」

「それは哲学者の見方かい？」

「それは違う。哲学者が、自分のいっていることがわかっているとしたら」ジュリアンは手綱を引いて馬を止め、ぼくを振り返った。傲然とした彼の有名な一族の風姿が、ジュリアンの物腰の一部になっていた。「いいかい、アダム。きみがぼくのためにできる大事なことがある——きみが危険にさらされるかもしれないけど、引き受けてくれるかい？」

「もちろん」とぼくはすぐさま答えた。

「じゃあ、よく聞いてくれ。そのうち予備役が、ウィリアムズ・フォードから外に通じている道を見

張り始めるだろう。まだ、彼らがそうしていなければの話だが。ぼくは出発しなければならない、そして出発するのは今夜だ。明日の朝になるまでは、ぼくがいなくなったことは気づかれぬし、少なくとも、最初はサムが気づくだけだろう。きみに頼みたいのはこういうことだ。まず家に帰る——きみの両親は徴兵のことを心配しているだろうから、安心させるんだ——でも今晚起きたことについてはいわないように——そして朝一番に、できるだけ目立たないようにエステートに行き、サムを見つけてくれ。彼に教会のホールで起きたことを話し、捕まらないようにできるだけ急いで町から出るようにいうんだ。ぼくはランズフォードで待っていると伝えてくれ。それが伝言だ」

「ランズフォード？ ランズフォードには何もないじゃないか」

「まさにそのとおり。予備役がぼくたちを探そうと思うような重要なものは、なにもない。秋にティップマンがいったことを覚えているかい？ 彼が本を見つけた場所のことを？ 発掘現場の中心近くにある低地だ。そこで、サムと落ち合うことにする」

「サムに伝えるよ」とぼくは約束した。冷たい風が吹いていて、まばたきをしたら、目が痛くなった。

「ありがとう、アダム」ジュリアンはまじめな顔でいった。「何もかも」そして彼は無理やり笑ってみせた。一瞬だけ、いつものジュリアンになった。一緒に栗鼠を追い、物語を紡いだ友だちだ。「メリー・クリスマス」と彼はいった。「ハッピー・ニューイヤー！」

そして彼は、馬の向きを変えて去っていった。

5.

ウィリアムズ・フォードにはドミニオン教会の墓地があった。家に帰る途中、ぼくはそこを通りかかった——月光の下で、彫り込みの入った墓石が陰鬱な雰囲気のを漂わせている——でも、妹のフラキシシーはそこには埋葬されていなかった。

前にいったように、チャーチ・オブ・サインは、その存在を認められていたけれど、ドミニオン教会に承認されていたわけではなかった。ぼくたちにはドミニオン教会の敷地の一区画を使用する権利はなかった。フラキシシーの場所は、ぼくたちの小さな家の裏手にあって、粗末な木の十字架が立っていた。それでもなお、ドミニオン教会の墓地はフラキシシーのことを思い出させたので、納屋に馬を戻した後、ぼくはフラキシシーの墓に立ち寄って（体が震えるほど寒かったにもかかわらず）、帽子を取って、あいさつした。生前、いつも帽子を取ってあいさつしたみたいに。

フラキシシーは明るく茶目っ気のある子で、そのニックネームの通り、亜麻色の髪をしていた。（本名はドロレスだったが、ぼくにとって妹は、どんなときでもフラキシシーだった。）全く突然に天然痘が彼女の命を奪ったのだが、そういった状況では、ぼくはむしろ運がよかった。ぼくも同じ病気にかかっていて、フラキシシーが死んだのを覚えていないからだ。ぼくは助かって、覚えているのは、熱が引いて目覚めたとき、家の中が妙に静かだったということだけだった。誰もぼくにフラキシシーのことを話そうとしなかったけれど、母さんの苦悩の目を見て、教えられることなく、真実を悟った。死がぼくたちにくじ引きをさせ、フラキシシーが短いわらを引いたのだった。

(フラキシシーのようなもののために、ぼくたちは天国を信じる心を持ちつづけるのだと思う。公認された教会の熱心な信者の他に、心から天国を信じている大人には、ほとんど会ったことがない。天国は悲しみに暮れる母さんにとって、十分な慰めにならなかった。でも五歳だったフラキシシーはその存在を熱心に信じていた——天国は野原のような場所で、野草が咲き乱れ、いつも夏のピクニックをしていられるところだと想像していた——もし、その子供らしい考えが、フラキシシーが最期を迎えるとき、彼女を安心させたのなら、それは実際よりもっと崇高な意味を持ったことになる。)

今晚、家の中は、フラキシシーの死の後につづいた服喪の期間とほとんど同じくらい静まり返っていた。ドアを開けると、母さんがハンカチで目頭を押さえ、父さんは難しい顔つきでパイプをくわえ、いつになくたばこを詰め、火をつけていた。「徴兵令だ」と父さんはいった。

「うん」とぼくはいった。「聞いたよ」

母さんはあまりに取り乱して、口が聞けなかった。父さんがいった。「おまえを守るためにできるだけのことをするよ、アダム。だが——」

「自分の国のために尽くすのは、怖くないよ」とぼくはいった。

「それは立派な態度だ」父さんはむっつりした顔でいった。母さんはさらに激しく涙を流した。「だが、まだ何がどうなるのかはわからない。ラブドルの状況は思っているほど悪くないかもしれない」

父さんは口数が少なかったけれど、ぼくは父さんを頼りにして、惜しみないアドバイスをもらっていた。例えば、父さんはぼくが蛇を嫌っているのを知っていた——そのため、母さんの口添えもあって、ぼくは、教会の洗礼を受けなくてよかったし、そのおかげで、ときおり他の教区民たちが負う毒液による腫れや切断も免れた——父さんはがっかりする一方で、蛇の扱いについて、実用的なことを教えてくれた。咬まれないように蛇をつかみ、必要になったときに、蛇を殺す方法など[「頭のうしろに首のようなところがある。そこをしっかりとつかむんだ。どんなにのたうちまわっても、しっほは無視しろ。動かなくなるまで、頭を強く、何度も打て」ぼくはこれらの指示をジュリアンに詳しく物語った。彼の蛇に対する恐怖心はぼくよりもずっと強かったのだ。「うわあ、ぼくにはとてもそんなまねはできないや！」彼は叫んだ。この臆病さの過剰は、彼のその後の人生を知る読者には驚きかもしれない。] その一風変わった信仰にもかかわらず、父さんは実際に役に立つことを重んじる人だった。

しかし、父さんが今晚ぼくに助言できることはなかった。まるで、追われている人間のように、袋小路のどん詰まりに突き当たり、前にも進めず、後ろにも退けず、身動きがとれないようにみえた。

ぼくは自分の部屋に戻った。眠れるとは思えなかった。代わりに——具体的な予定はなかったけれど——持ち物のいくつかを運びやすいようにまとめた。まず銃、そしてノートと書きためた文章、それから『宇宙における人類の歴史』。塩漬の豚肉かそのたぐいのものを加えるべきだと思ったけれど、それは後にしようと思った。母さんに荷造りをしているところを見られたくなかったからだ。

夜明け前、ぼくは重ね着をして、厚手のパクール帽をかぶり、耳が毛に覆われるようにつばを下げた。部屋の窓を開けて、窓枠によじのぼり、ライフルと荷物を取り出した後、背後のガラス窓を閉め

た。そして、忍び足で庭を横切って納屋まで行き、馬（ラブチャーという名の去勢馬で、走るのが一番速い。でも父さんの馬が一頭少なくなることになる）に鞍を置き、明け方の空の下、出発した。

昨夜、短い間に降った雪がまだ地面を覆っていた。この冬の朝に最初に起きたのは、ぼくではなかった。冷たい空気は、すでにクリスマスの匂いに満ちていた。ウィリアムズ・フォードのパン屋がキリスト降誕のお祝いのケーキとシナモンパンをせっせと焼いているのだ。イーストの発酵した甘い香りが、うっとりするような霧のように、町の北西部のはずれに漂っていて、風もなく、そこにとどまっていた。夜が明け始め、あたりは青白く、しんと静まり返っていた。

クリスマスのしるしはそこここにあった——それもそのはずだ。今日はその共通の祝日の前日だった——しかし、徴兵令のしるしもあった。予備役はすでに起きていて、むさくらしい軍服に身を包み、影のように通りすぎていった。金物店のそばに彼らの一団が集まっていた。色あせた旗を掲げ、札を立てていたが、ぼくにはそれが読めなかった。兵士たちとの間に一定の距離を置いていたからだ。でも、それを見たとき、徴兵の掲示だとわかった。町に通じている主な通りが、厳しく監視されているのは間違いなかった。

ぼくは、昨夜ジュリアンとぼくが通った川沿いの道を進みながら、エステートへ向かった。風がなかったため、ぼくたちの足跡はそのまま残っていた。この道を最近通ったのは、ぼくたちだけだった。ラブチャーは、自分の蹄の跡を再びたどっていた。

エステートの近くでありながら、松の木立に身を隠せる場所で、ぼくは馬の手綱を苗木に結びつけ、歩きだした。

ダンカン&クロリー・エステートには、囲いがなかった。敷地の境界の区別がなかったからだ。土地制度のもとでは、ウィリアムズ・フォードにあるすべての土地はふたつの名門貴族が（法的に）所有していた。ぼくは西側から近づいていった。そこは半分木々に覆われていて、貴族たちが気軽な乗馬や狩りをするときに使う場所だった。今朝、その雑木林には誰もいなかった。整形式庭園がそこから始まることを示す垣根には、雪が降り積もっていたが、そこを通るまでは、人を見かけなかった。ここは夏、りんごや桜の木が花を咲かせ、果実をつけるところだ。花壇は色や香りのシンフォニーを奏で、そのまわりを、歓喜の声をあげて蜂が飛びまわるのだ。しかし、今は何もなく、小道は雪で覆われていた。年寄りの管理人が、エステートの中の最寄りの大邸宅の玄関床をほうきで掃いていたが、他には誰も見かけなかった。

邸宅はクリスマスの飾りつけがされていた。クリスマスは、予想できるかもしれないけれど、町そのものより、エステートの方が、盛大に祝っていた。ダンカン&クロリー・エステートの冬の人口は、夏ほど多くはなかったけれど、それでも両家の人々に加えて、選ばれたいとこや取り巻きやらが、冬ごもりのためにやってくる。ジュリアンの教育係、サム・ゴドウィン是最も豪華なふたつの建物のどちらにも寝ることを許されておらず、白い支柱のある家で、エリート職員たちと一緒に寝ていた。しかし、そこも、他の場所からして見れば、大邸宅だと見なされるような建物だった。ジュリアンとぼくが授業を受けていたのもそこだったので、ぼくは建物のことをよく知っていた。そこも、クリスマスの飾りつけがされていて、ドアにはヒイラギのリース、まぐさには松の大枝が下げられていた。

建物の軒からは十字架の旗がぶらさがっていた。ドアに鍵がかかっていなかったのだから、ぼくはそっと中に入った。

まだ朝早かった。少なくとも、貴族たちとエリートの使用人たちはまだ起きていない時間だった。タイル張りの通路には人影もなく、ひっそりとしていた。ぼくは、サムが寝起きし、授業を行う部屋へまっすぐ向かった。遠くの突き当たりにある窓から曙光がさしこみ、櫛の廊下がほのかに照らされていた。床にはカーペットが敷かれていたので、足音はしなかった。でも、ぼくの靴は湿った足跡を残した。

サムのいる部屋のドアの前で、ぼくは苦しい選択を迫られた。ノックはできない。他の人を起こしてしまう恐れがあった。ぼくの任務は、できるだけ目立たないようにジュリアンのメッセージを届けることだ。でも人が眠っているところに入るなんて、許されるのだろうか？

ドアの取っ手に手をかけると、勝手に動いた。ぼくはほんの数センチだけドアを開けて、「サム？」とささやくつもりだった——あらかじめ注意を促しておこうと思ったのだ。

でも、サムの声があった。ぼそぼそと低くつぶやく声で、まるで独り言をいっているようだった。ぼくは耳をそばだてた。奇妙な言葉だった。のどの奥でがらがらいうような言葉で、英語ではなかった。彼は一人ではないのかもしれない。でも、後戻りするには遅すぎた。それで、ずうずうしく押し通すことにした。ドアを思いっきり開けて、中に入っていった。「サム！ ぼくだ、アダムだ。ジュリアンから伝言があるんだ——」

ぼくは、そこで見た光景にびっくりして棒立ちになった。サム・ゴドウィン、歴史や地理の基礎知識を教えてくれた、無愛想だけれど見慣れたサム——が、黒魔術、あるいは何らかの魔術を行っていた。しかもクリスマスイブに！ 彼は肩まである縞模様の外衣をかぶっていて、腕には革ひもを巻きつけ、額には箱のような道具を革ひもで固定していた。九本のろうそくが、古いティップから拾い出されたような真鍮のろうそく立てにさし込まれていて、サムの手は、そこに向かって高く掲げられていた。彼がぶつぶつとつぶやいていた祈りは、部屋じゅうに響き渡っているように聞こえた。パー、ルーク、ア、ター、アテン、アイ、ヘロー、ヘイ、ノー……

ぼくは口をあぐりと開けた。

「アダム！」サムはぼくと同じくらい驚いて、声をあげた。そして、慌てて背中のショールを引っぱり、さまざまないかげしい装具を取りはずした。

あまりに予期せぬことで、ぼくは何が何だかほとんどわからなかった。

やがて、恐ろしいことに、気づいてしまった。ドミニオン教会の学校では、ベン・クリールからしばしば世俗的な時代の不道德で邪悪な行いについて聞かされていた。彼がいうには、そのうちのいくつかは、東部の町にまだ残っているらしい——不敬、不信仰、無神論、オカルティズム、墮落。そして、ぼくは深く考えずに、ジュリアンや（間接的に）サムからそういった考えを学び、そのうちのいくつかについては、ぼくは信じ始めてさえた。アインシュタイン説、ダーウィニズム、宇宙旅行……ぼくはニューヨークの異教信仰の先導者に誘惑されたのだろうか？ 哲学にだまされたのだろうか？

「伝言」異教徒の服を隠しながら、サムがいった。「何の伝言だ？ ジュリアンはどこだ？」

でも、ぼくはそこにいることが耐えられなくなって、部屋を飛び出した。

サムが猛スピードでぼくの後を追って、邸宅から飛び出してきた。ぼくは速かったけれど、サムも足が速かった。軍隊で鍛えられ、四十代後半にして力強く、ぼくは冬の庭で捕まえられた——後ろから組みつかれたのだ。足を蹴り上げて、体を引き離そうとしたけれど、サムはぼくの肩を押さえ込んだ。

「アダム、頼むから落ち着いてくれ！ 神のために」彼は叫んだ。なんと厚かましい、とぼくは思った。神を引き合いにだすなんて——でも、それから彼はいった。「何を見たのかわからないのか？ わたしはユダヤ教徒だ！」

ユダヤ教徒！

もちろん、ユダヤ教徒のことは聞いたことがあった。聖書の中の人物、そしてニューヨークに住んでいる。彼らとぼくたちの救世主との関係はあいまいで、それが昔から非難的となり、ユダヤ教はドミニオン教会には承認されていなかった。でも、ぼくはこれまで実物のユダヤ教徒を見たことがなかった——そして、サムがずっとそうだったということに驚いていた。いわば、隠していたということだ。

「じゃあ、みんなをだましていたんだ！」とぼくはいった。

「キリスト教徒だといった覚えはない！ それについて話したこともない。だが、それがどうしたっていうんだ？ ジュリアンから伝言があるといったな——早くいってくれ、ちくしょう！ ジュリアンはどこだ？」

何と答えるべきだろう、というより、もし答えたら、誰を裏切ることになるのだろうか？ 世界がひっくり返ってしまった。ベン・クリールの愛国心や忠誠についての説教を思い出し、罪悪感や恥ずかしさがどっと込み上げてきた。ぼくは、背信行為をしたり、神の存在を否定したりしていたのだろうか？

しかし、ぼくはジュリアンの最後の頼みを聞いてあげなければいけないと思った。サムがユダヤ教徒であろうとイスラム教徒であろうと、ジュリアンはぼくに秘密の情報を届けてほしいと思うに違いない。「市外に通じるすべての道に、兵士がいるんだ」ぼくはむっつりといった。「ジュリアンは昨日の晩、ランズフォードに向かった。そこでサムと落ち合いたいって。さあ、もう離してよ！」

サムは、愕然とし、ぼくを離れた。顔に不安がはっきりと表れていた。「そんなに急に始まったのか？ 新年になるまで待つかと思っていた」

「何が始まったのかぼくは知らない。全く何も知らないんだ！」そういって、ぼくは立ち上がると、死んだような庭から走り出て、ラブチャーのいるところまで戻った。ラブチャーは、同じ木につながれたままで、誰にも踏まれていない雪に意味もなく鼻をすりつけていた。

ウィリアムズ・フォードの方向に、数百メートル行ったところで、後ろから馬に乗った別の人物がやってきて、ぼくの右側についた。それは、ベン・クリール本人で、帽子に手を触れ、ぼくに笑いかけて、こういった。「一緒に行ってもかまわないかい？ アダム・ハザード君」

いやだとはとてもいえなかった。

ベン・クリールは牧師ではなく——そういう人はウィリアムズ・フォードにはたくさんいて、それぞれが自分の宗派に属していた——地元のイエス・キリスト教団協議会の代表だった。ある意味、エステートを所有する者たちと同じくらい大きな力を持っていて、牧師でなかったとしても、少なくとも町民たちの指導者のようなものだった。馬具屋の息子として、ここウィリアムズ・フォードに生まれ、エステートの負担で、コロラド・スプリングスにあるドミニオン教会の大学のひとつで学んだ。これまで二十年の間、週に五日小学校で教え、日曜日には教会でキリスト教入門の授業をした。ぼくが初めて平板に文字を書いたのも、ベン・クリールの授業だった。毎年独立記念日に、彼は町の人々に十三本の筋と六十個の星について、その象徴的な意味を思い出させるように、演説をした。クリスマスにはいつも、ドミニオン教会のホールで、全キリスト教会の礼拝を執り行った。

かっぶくのいい彼は、こめかみが白くなりかけていて、きれいにひげを剃っていた。ウールの上着を着て、鹿革の長いブーツを履き、ぼくのものとは比べてもそれほどいいとは思えないパクール帽をかぶっている。しかし、歩いているときと同じくらい、馬に乗っているときも、気品を漂わせていた。彼の表情は優しかった。いつもそうだった。「ずいぶん朝早くから外出しているんだね、アダム・ハザード」と彼はいった。「こんな時間に外で何をしているのかな？」

「何でもありません」とぼくは言って、顔を赤らめた。否定の意味をこれほどまでに表す言葉が他にあるだろうか？ その状況で、「何でもない」と答えることは、何か悪いことをしようとしていたと告白するようなものだった。「眠れなくて」とぼくは慌ててつけ足した。「栗鼠か何かを狩ろうかと思ったんです」鞍にライフルが縛りつけられている言い訳になる。少なくとも、ちょっとはもっともらしく聞こえる。栗鼠はまだ活動していて、冬ごもりに備えて、食べ物を集めているところだし。

「クリスマスイブに？」ベン・クリールが訊いた。「エステート敷地内の雑木林で？ ダンカンとクローリー家に知られなければいいが。あそこの林を大切にしているからね。それに、この時間に銃声があったら、彼らが起きてしまうに違いない。一般的に言って、金持ちやエステートのものたちは、明け方をずっと過ぎてから起きるからね」

「撃ちはしませんでした」とぼくはぼそぼそといった。「考え直してやめたんです」

「それはよかった。賢い判断だ。町に戻るところかね？」

「ええ、そうです」

「では、同行させてもらおうか」

「ええ、どうぞ」それ以外に答えようがなかった。一人で考えごとをしていたかったんだけど。

馬はゆっくりと進んだ——雪のせいで、ぎこちない歩き方だった——ベン・クリールは長い間黙っていた。そして口を開けた。「怖がっているのを隠す必要はないんだよ、アダム。何の心配をしているか、わかっているんだ」

一瞬、とんでもない考えが頭をよぎった。ベン・クリールはエステートの廊下で、ずっとぼくの後ろにいて、サム・ゴドウィンが旧約聖書の装具に身を包んでいたのを見たのではないだろうか。そうだとしたら、大変な騒ぎになる！（そして、それがまさにサムがずっと恐れていたことなんだとぼく

は思った。チャーチ・オブ・サインに属するよりも、もっと悪い。いくつかの州では、ユダヤ人が宗教活動を行ったら、罰金を科されるだけでなく、投獄されることもあった。アサバスカでは、このことについてどういう立場をとっているのか知らなかったけれど、ぼくは最悪の事態を恐れた)しかし、ベン・クリールは徴兵のことをいっていた。サムのことではなかった。

「町の少年たちの何人かと、すでにこのことについて話したんだ」と彼は言った。「きみ一人じゃないんだ、アダム。それがいったい何を意味するのか、その軍事行動が、そしてその結果何が起こるのかと心配しているんだったら。そして、きみの場合はちょっと特別だ。わたしは、きみのことをずっと見ていた。遠くからね。ちょっと止まってくれ」

ぼくたちは、小高い丘になっている、パイン川に面した断崖に来ていた。そこからウィリアムズ・フォードの南側が見渡せる。

「あれを見てごらん」ベン・クリールがその方向をじっと見つめながら、そういった。彼は手を伸ばし、弧を描くように動かした。町を成している建物の一群だけではなく、人気のない野原、濁った川の流れ、そして水車の輪や、低地帯にある契約労働者が住む小屋までも包みこむように。一気に谷が生き物のようにみえた。季節特有のすがすがしい空気を吸い込み、白い息を吐いている。それは、青く静かな冬の空気の中に置かれた絵画のようだった。樫の木のように深く根を張っているようでもあり、聖誕の情景のガラス球のように壊れやすくもあった。

「あれを見てごらん」ベン・クリールが繰り返していった。「ウィリアムズ・フォードを。美しい町だろう。どうだい、アダム？ ただの場所じゃないだろう。あれは、生き方なんだ。われわれすべての努力が合わさったものなんだ。父より与えられ、息子たちに引き継がれ、母が眠り、娘が葬られる場所だ」

また、哲学だ。朝の騒動の後で、耳にしたいことなのかどうか、わからなかった。でも、ベン・クリールの声は、フラキシ―とぼくが咳に苦しむたびに、母さんが飲ませた咳止めのシロップのように、心の中に流れてきた。

「ウィリアムズ・フォードの少年はみな――兵役の年齢に達している少年たちみんなだ――自分が一番よく知っている場所をどんなに去り難いか、気づき始めた。きみでさえも、そうじゃないかい？」

「ぼくは、みんなと同じように、行ってもかまわないと思っています」

「わたしは、きみの勇気や忠誠心を問おうとしているわけじゃないんだ。きみは、ほかの場所の生活がどんなものなのか、少しは知っているだろう――ジュリアン・コムストックと深く関わっているからね。ジュリアンは立派な若者で、熱心なキリスト教徒だとわたしは固く信じている。それ以外にどうあろうというのか。彼は国家を掌中に握る男の甥だ。だが、ジュリアンが経験してきたことは、きみとはかなり違う。彼は都市の生活――昨晚ホールで見たような映画(きみたちの姿も見えたよ。後ろの席に座っていたね?) やきみのような素姓の少年を興奮させるような、普通とは異なる本や思想――に慣れ親しんでいる。間違っているかい？」

「いいえ、おっしゃる通りです」

「そして、ジュリアンがきみに話したことのほとんどは、その通りだろう。わたしも少々、旅をする

のでね。コロラド・スプリングス、ピッツバーグ、そしてニューヨークも見てきた。東部の町は堂々たる、誇り高き大都市だ——世界で最も偉大で、生産的な場所だ——そしてそれらは守る価値がある。それが、われわれが必死になってラブラドルからオランダ勢を追い払おうとしている理由のひとつなのだ」

「わかります」

「きみにわかってもらえて嬉しい。若者が陥りやすい落とし穴があるからね。これまでも見てきた。ときには、そういった大都市のひとつが若者の逃げ場所となる——義務、責任、そして母親のひざの上で学んだ教訓のすべてを免れることができる場所だ。信仰や愛国心といった単純なことが、若者にとって重荷になり始め、あまりに重くなったら、振り捨ててしまう」

「ぼくはそうではありません」

「もちろんだ。だが、別の理由もありえる。きみたちは徴兵のため、ウィリアムズ・フォードを出てゆかなければならないかもしれない。多くの少年の脳裏をかすめるのは、こういうことだ。どうせ町を出なければならぬのなら、自ら出て行って、自分の定めをアサバスカ部隊ではなく、大都市の街頭に見つけよう、と……きみは、そうじゃないというだろうよ、アダム。だが誰も、そんな考えが心をよぎることがある」

「ええ、わかります」とぼくはつぶやいた。自分が罪の意識を感じ始めていることに気がついた。ぼくはジュリアンが語った街の話や、サムによる怪しげな授業、そして『宇宙における人類の歴史』に、確かに少し心を惑わされていた——町に対する義務のようなものを忘れてしまっていたかもしれない。青い空気の中、すぐ近くにひっそりと存在していて、そこにずっといたいと思わせる町に対する義務を。

「わかっている」とベン・クリールがいった。「きみの家族にとって、必ずしも楽ではなかったということ。特に、きみの父親の信仰が厄介なものだったから、われわれは常にいい隣人同士だったわけではない——町を代表していわせてもらえばだが。当然のことながら、きみは他の少年たちから仲間はずれにされただろう。教会の活動でも、ピクニックでも、友だちづきあいにおいても……そう、ウィリアムズ・フォードでさえも完璧じゃない。だが、アダム、わたしはきみに約束する。もし軍隊に入ったら、特に戦争の試練の中では、故郷の町の汚い通りできみを避けた同じ少年たちが、きみの親友になり、きみを一番に守ってくれ、きみも彼らに同じように接するだろう。われわれが受け継いで来た共同遺産がわれわれをつなぎ合わせてくれる。それは普段ははっきりと見えないものかもしれないが、過酷な戦闘状況では、明らかになるんだよ」

ぼくは、長いこと、他の少年たちから悪口をいわれて傷ついてきたので（例えば、「他の家では鶏を飼っているけど、ぼくの父さんは毒蛇を飼っている」とか）ベン・クリールのいうことは、ほとんど信じられなかった。でも、チャールズ・カーティス・イーストンの小説で読んだ以外、ぼくは現代の戦争についてほとんど知らなかったもので、それは本当かもしれなかった。そして、そのことを想像して（それはベン・クリールが意図的にしたことだった）、ぼくはさらに恥ずかしく思った。

「ほら」とベン・クリールがいった。「聞こえるかい、アダム？」

聞こえる。耳をふさぐことなんてできない。朝の礼拝の時間を告げるドミニオン教会の鐘が鳴っていた。冬の空気の中で、高らかな音が響き渡る。それは、寂しくもあり、心が慰められるようでもあった。ぼくは思わず、教会へ走って行きたくなった——再び子供に戻ったように、ぼくはそこに身を寄せたかった。

「そろそろ行かないと」ベン・クリールがいった。「先に行ってもかまわないかね？」

「もちろん、結構です。ぼくのこととはどうかお気になさらずに」

「われわれがお互いを理解しているかぎりには、アダム。そんなに気を落とすな！ 未来はきみが考えるより明るいかもしれんぞ」

「そういつてくださって、ありがとうございます」

ぼくは低い断崖の上で、長いことゆっくりしながら、ベン・クリールの馬が彼を町へ連れていくのを見ていた。日なたにいても寒くて、ぼくはブルツと震えた。それは、天気の良いというより、心の葛藤からきていたのかもしれない。ベン・クリールとの会話で、自分が恥ずかしくなった。ここ数年、ぼくが自由で無規律な生き方をしている、不可知論者の若い貴族と年取ったユダヤ教徒が差し出した魅力的な哲学の前に、純真で素朴な信仰をどれほど捨て去ったのかと指摘されたのだった。

それから、ぼくはため息をつき、ウィリアムズ・フォードへ向かう道へとラブチャーをせきたてた。ぼくは両親にどこへ行っていたのか説明し、徴兵されても——ぼくは喜んでそうされるつもりだった——それほど苦労することはないとあって、安心させるつもりだった。

ぼくは朝の出来事の良いで、うなだれていて、ラブチャーが自分の足跡をたどっているときでさえ、視線をぼんやりと地面に向かって泳がせていた。前にもいったように、町とエステートの間のこの裏道に積もった雪はほとんど乱れていなく、そのままだった。今朝、自分がどこを通ったのかわかったし、本に載っている形のようにラブチャーの蹄の跡がはっきりと残っていた。(ベン・クリールはエステートに泊まっていたに違いなかった。彼はぼくを断崖に残して、最短ルートで町に向かったのだろう。ラブチャーだけがこの道を通っていた。) それから、ぼくは、ジュリアンとぼくが昨晚別れた場所に着いた。そこにはもっと蹄の跡があった。実際、たくさんの——

そして、雪に覆われた地面に残っていた(実質的に)あるものに気づいた——それを見て、ぼくははっとした。

すぐに手綱を引いて馬を止めた。

ぼくは南を見た。ウィリアムズ・フォードの方向だ。そして東を見た。昨晚、ジュリアンが向かった方向だ。

そして、身が引き締まるような凍てつく空気を吸い込むと、最も急を要する道へと進んだ。

6.

ウィリアムズ・フォードを貫く東西の道は、特に冬の間は、それほど交通量が多くなかった。

南の道路——電線が道に沿って張られていたので、電線通りとも呼ばれていた——は、ウィリアムズ・フォードとコンノートにある鉄道の始点を結んでいて、かなりの交通量だった。しかし、東西の道は基本的に、どこに向かうものでもなかった。世俗的な時代の古い遺物で、主にティップマンや個人の古物商がその道を使ったが、それも暖かい時期だけだった。もし古い街道を行けるところまで行ったら、その先にある五大湖か、さらに東部のどこかに着くかもしれない。逆方向に進むと、ロッキー山脈の浸食や山崩れに遭遇して、埋没する恐れがある。しかし、鉄道——そしてさらに南へと平行して走っている道路——はそういったあらゆる困難との出会いを取り除いてくれた。

それでもなお、ウィリアムズ・フォードの町はずれから先の東西の道は厳重に監視されていた。予備隊はその道が見渡せる丘に一人の兵士を配置していた。そこは、この前の十月に、ティップから帰る途中、ジュリアンとサムとぼくがブラックベリーを摘むために立ち止まったのと同じ丘だった。しかし、予備隊の兵士が予備役にとどまっていた、前線に送られていないのは、主に身体が精神に障害や欠陥を持っているという理由からだ。あるものは負傷した古参兵で、手が腕をなくしていた。あるものは、あまりに知能がなかったり、陰気な性格だったり、規律の正しい軍隊では、任務を果たせなかった。歩哨として丘の上に立たされた男について確かなことは何もいえないけれど、彼が馬鹿でないとしたら、少なくとも無頓着だった。自分の身を隠すこともなく、彼の（そしてライフルの）シルエットが、明るい東の空を背景に、くっきりと見えていた。でも、わざとそうしていることも考えられた。逃亡しようとするものに、行く手がさえぎられているとわからせるために。

しかし、すべての道がふさがれていたわけではなかった。ウィリアムズ・フォードに生まれ育ち、周囲のいたるところを探索していたものにとっては、ぼくはジュリアンの後をそのまま追いかけて、少し北に向かい、それから契約労働者が住んでいる込み合った路地を通り抜けた（ぼろを着た労働者の子供たちは、掘っ建て小屋のガラスのない窓から、ぼかんと口を開けて、ぼくを見つめていた。軟質炭の火で、静止した空気が、薄くかすんでいた。）その道は、小麦畑を横切る小道に通じていて、そこは、収穫物の運搬や畑仕事の雇い人たちの往来に使われていた——長年の使用で、道が削られて深くなっていたので、ぼくは路肩に沿って立てられた、杭に横木を打ちつけたジグザグの柵の裏側を通った。遠く離れた歩哨からは見えないところだった。無事に東まで行って、ぼくは、牛の通り道を南下し、再びその道と交わっている東西の街道へ出た。

そこで目にしたのは、ウィリアムズ・フォードでぼくを警戒させたのと同じしるしだった。幸い、細かい雪は風に乱されていず、そのままだった。

ジュリアンはこの道を通った。予定していた通り、真夜中になる前にランズフォードに向かった。その後まもなく雪がやんだようだった。彼の馬の蹄の跡は、輪郭がぼやけて、うっすらと雪に覆われていたが、はっきりと確認できた。

しかし、蹄の跡はそれだけではなかった。第二の蹄の跡があり、輪郭がもっとはっきりしていることから、最近のものだということがわかる。おそらく夜のうちにつけられたものだろう。これは、ぼくがウィリアムズ・フォードの十字路で見たのと同じものだった。追跡を示す形跡だ。誰かがジュリアンの後を追っていて、ジュリアンはそれを知らない。これは恐ろしいことを意味していた。唯一の

救いは、追跡者は兵士の集団ではなく、一人だけだということだ。もし、エステートの有力者たちが、逃走したのがジュリアン・コムストックだと知ったら、きっと全部隊を送って彼を連れ戻そうとするだろう。ジュリアンは、ただの悪党か、労働者の難民か、徴兵制から逃れようとしている若造だと勘違いされ、野心を抱いた予備役に追われているのだろう。さもなければ、ぼくのすぐ後ろに、大部隊がいるかもしれない……あるいは、すぐに来るのかもしれない。今ごろはもう、ジュリアンがいなくなっていることに気づいているはずだから。

ぼくは、東に向かった。ふたつの足跡にぼくのもの加わった。

そのうち昼が過ぎ、太陽が南西の地平線に落ち合う角度に移動したところ、ぼくは考え直し始めた。ぼくは何をしようとしているんだろう？ ジュリアンに警告するため？ もしそうなら、出だしがちょっと遅すぎた……でも、ある時点で、ジュリアンが自分の足跡を隠すか、でなければ、追っ手をまいていたらと思った。追っ手は、ぼくが持っている有利な情報、つまりサム・ゴドウィンが到着するまで、ジュリアンがどこにいるつもりなのか知らないのだ。そうでなかったら、ぼくが、捕らえられたジュリアンを救おう、半ば想像して、そう考えた。予備役が何を持っているにせよ、ぼくには、銃と数回分の弾薬（そしてナイフと自分の機知、両方ともたいした効力がないもの）しかなかったけれど。ともかく、こういった考えは、計算や計画というよりも、願望や不安に近かった。ジュリアンを助けに向かい、ぼくがサムにメッセージを伝え、サムが目立たないように、できるだけ急いでエステートを出てくると彼に伝える他は、きちんとした計画はなかった。

それからどうするか？ その質問を自分に訊ねる勇氣はなかった——この人里離れた寂しい道では、ティップもとっくに過ぎてしまっていて、こんなにウィリアムズ・フォードから遠いところに来たのは初めてだった。道の両側に平地が広がっていて、霜で覆われた火星の平原のようだった。午前中は吹いていなかった風が、上着の裾を引っ張り始め、ぼくの影はかかしが馬に乗っているかのように、目の前に長く伸びていた。寒さが身にしみ、それが増してきた。まもなく、冬の月が空に昇り始めようとしていた。鞍袋には、五十グラム程度の塩漬け豚肉とマッチ数本が入っているだけで、夕暮れまでに焚きつけ用の木を手に入れることができ初めてマッチが使えるというものだった。自分がすっかり正気でなくなってしまったのではないかと思いはじめた。何度かぼくは考えた。今なら帰れる。ひょっとしたら、いなくなっていることにまだ気づかれていないかもしれない。両親と一緒にクリスマスイブの夕食の席につくの間にまだ間に合うかもしれない。フラキシシーのため、過ぎ去ったクリスマスのために、りんご酒のグラスを掲げ、ちょうど祝日の音が鳴り響く時間に目覚め、焼きたてのパンと、シナモンとブラウンシュガーに浸された聖誕の煮りんごの匂いをかぐ。ぼくは繰り返す、そのことを思い、ときには涙ぐんだ。しかしぼくは、暗い影を落としている地平線に向かって、ラブチャーとともに、歩みつづけた。

薄氷が張っている小川から水を飲むためにちょっと立ち止まった以外は、ぼくたちは進みつづけて、永遠につづくかと思われた夕暮れが終わりを告げようとしたころ、世俗的な時代の古い遺跡群にたどり着いた。

それらは壮大なものとはいえなかった。しゃれたスケッチはしばしば前世紀の遺跡を次のように描

く。折れた歯のように崩れ、中が空洞になっている背の高い建物。裂け目が蔓で覆われ、暗い袋小路のようになっている。恐らくそういう場所は存在するだろう——しかし、ほとんどは、人が住めない南西部にあり、そこでは「飢餓が王位に就き、明白に彼のために作られた領土を君臨」していて、蔓草や熱帯植物の繁殖を妨げていた[オールド・マイアミかオランダがその望みを満たし始めているかもしれないが]——しかし、多くの遺跡はぼくが今来たようなところで、地表がただ不規則に(あるいは、より正確に言えば、規則的に)でこぼこして、以前そこに建物の土台があったことを示していた。こういった地形は足場が不安定で、深い地下が隠れていて、不注意な旅行者に向かって飢えた口を開くこともあり、ティップマンだけが愛好する場所だった。ぼくは道からはずれないように気をつけた。しかし、想像していたほど簡単にジュリアンを見つけられるのだろうかとかぼくは思い始めていた——「ランズフォード」は広い場所だった。しかも、進路を決めるのに頼りにしていた蹄の跡を、風がすでに吹き払い始めていた。

心の中に、前世紀の偽りの審判の時代の記憶が、絶えず立ち現れた。こういった土地では、人骨を目にすることも珍しくなかった。たくさんの人々が、石油時代の終わりの最悪の混乱の中で死んでいった。病気で、内紛で、しかし大部分は餓死で。石油時代は、土地の肥沃化と灌漑を猛烈な勢いで行い、つましい農業が支えられるよりも、もっと多く人々を養った。ぼくはその荒廃した時代のアメリカ人の写真を見たことがある。やせこけていて、彼らの子供たちの腹は腫れ上がり、みな「救援キャンプ」に押し寄せていたが、想像していた「救援」が想像のままで終わったとき、そこはただちに共同墓地と化した。ぼくたちの先祖がそういった十数年を最後の審判の時代と思ったのも無理はなかった。驚くべきことは、今も存在している公共機関——教会、軍隊、連邦政府——は、ほとんど被害を受けなかったため、そのまま残っているということだ。学校で、偽りの審判の時代の話が出るたびに、ベン・クリールが読み上げるドミニオン聖書の一節がある。ぼくはそれを覚えさせられた。「田畑はやせ衰え、土地は嘆き悲しんだ。トウモロコシがしなび、ワインが乾き、石油がなくなったのだ。農民よ、自分を恥じよ。わめけ、ワインの持ち主よ、小麦と大麦を求めて泣きわめけ。田畑の作物は枯れたのだ……」

それを聞いて、ぼくは身震いしたものだ。そして、それは今、一世紀の間の発掘で、役立つものを根こそぎ奪われた不毛の地に立つぼくを震えあがらせた。このがれきのどこかにジュリアンがいるのだろうか。追っ手はどこだろう？

ぼくがジュリアンを見つけたのは、たき火に気づいたからだった。しかし、ぼくが最初ではなかった。

ランズフォードで、つい最近発掘された区画に来たときには、太陽はすっかり沈んでいて、薄暗い月明かりに照らされた北の空に、うっすらとオーロラの色配が感じられた。ティップマンの仮設住宅——廃材で作られた粗末な小屋——は、その時期使われていなかった。丸太のスロープが誰もいない発掘現場へと渡されていた。

昨晚降った雪が、落ち葉や小さな砂山の上に吹き寄せられていて、蹄の跡はすべて消されていた。

しかし、ぼくはゆっくりと進んだ。目的地の近くにいるとわかっていただけだ。ジュリアンの追っ手は、それが誰であろうと、自分の任務を終えて、まだこちらの方向には戻ってきてはいないようだった。ジュリアンは捕まっていないか、あるいは、少なくとも追っ手に連れられて、ウィリアムズ・フォードに戻っていないということだ。その考えは、ぼくを元気づけた。夜の間、追っ手は追跡を一時中断しているのかもしれない。

ほどなく——といっても、雪の下に隠れている穴を避けるため、ラブチャーは凍てついた道を小股で用心深く歩いていたので、ぼくには永遠に感じられたが——別の馬のいななきが聞こえ、月の光に輝く夜空に煙がもくもくと立ち上っているのが見えた。

ぼくはすばやくラブチャーを脇道にやると、低いコンクリートの遺跡の柱に手綱を結びつけた。その柱からは、一面さびに覆われた鉄の棒が、骸骨の指のように突き出ている。鞍につけたホルスターから二十二口径の小型ライフル銃を取り出し、煙の出所へ歩いて行くと、地形がかなり急勾配になっている場所から煙が出ているのがわかった。恐らく、ティップマンが『宇宙における人類の歴史』を掘り出した発掘場所だろう。ジュリアンはサムと落ち合うため、そこに入ったに違いない。そして、実際に、ジュリアンの馬がいた。エステートの優駿馬のうちの一頭で（所有者の目から見れば、百人のジュリアン・コムストックより、もっと価値がある）岩につながれていた……そして、驚いたことに、それほど遠くないところに別の馬がいた。二番目の馬は、見たことがなかった。やせてあばら骨が浮き出ているようにみえた。しかし、軍用の馬具と布の胸当てのようなもの——青地に赤い星で、馬が予備役のものであることを示している——をつけていた。

ぼくは、月に照らされた崩壊した迫台の影に隠れて、状況を観察した。

煙は、凍てつく夜をしのぐため、ティップマンが発掘していた地下の穴の中に、ジュリアンが入っていることを示していた。第二の馬の存在は、ジュリアンが見つかってしまい、すでに追っ手と対峙していることを示していた。

それ以上のことはわからなかった。抗争の現場へできるだけこっそりと近づき、何が起きているか探るより他はなかった。

ぼくはそっと忍び寄った。発掘現場は月明かりに照らされ、深いけれども、狭い穴であることがわかった。そこは、部分的に板で覆われていて、一方の端が傾斜していて、入り口になっていた。数メートル奥に、板張りを切って作った煙突用の穴があり、そこからやっと中の火の光が見えた。見たかぎりでは、出入り口はひとつしかなかった。姿を見られずにできるだけ進もうと決心し、傾斜地に身をかがめ、冷たい地面——北極地方北部の不毛の地のように思えた——にズボンの尻をつけて、じりじりと前進した。

ぼくはゆっくりと、慎重に、静かに進んでいるつもりだった。しかし、それは十分ではなかった。掘り起こされた部屋——中で火の明かりがめまぐるしく変わる影を投げかけている——がちらりと見えるところまで進んだとき、耳の後ろに圧力を感じた——銃身だった——そして声がした。「そのまま進め。下にいるおまえの仲間に加わるんだ」

自分の陥った状況が飲み込めるまで、ぼくは黙っていた。

ぼくを捕らえた者は、発掘現場のさらに奥底へとぼくを進ませた。空気は湿っぽかったけれど、はっきりとわかるくらい暖かかった。吹きすさぶ風はしのぐことができた。ただ、世俗的な時代の商業施設の地下室か貯蔵室だった場所は、空気がよどんでいてかび臭く、たき火が放つ臭気からも逃れられなかった。

ティップマンは、ほとんど何も残していなかった。割れた破片が散らばっているだけで、それもほこりや土がかぶっていて、何なのか見分けがつかなかった。奥の壁はコンクリートでできていて、壁を背にたき火が焚かれていた。そこは、回収業者がそこで仕事をしているときに開けた煙突の穴の下でもあった。たき火は石で囲まれていて、湿った板や木屑がパチパチとうわべだけは元気な音をたてた。発掘現場の深くなっているところは、人がまっすぐ立てないほど天井が低くて、いくつかの方向に広がっていた。

ジュリアンはたき火の近くに座っていて、壁に背を向け、ひざを抱えて、あごに引き寄せていた。すすで服が汚れている。顔をしかめていたが、ぼくを見ると、もっと険しい表情になった。

「そこへ行って、やつの隣に座れ」ぼくを捕らえた者はいった。「だが、その前に、その鳥撃ち用の小さなライフルを渡せ」

ぼくは、素直に武器を渡し、ジュリアンに加わった。そこで初めて、ぼくを捕らえた男の顔をじっくりと見ることができた。ぼくよりたいてい年上には見えなかったけれど、青と黄色の予備役の軍服を着ていた。帽子を目深にかぶっていて、いつ待ち伏せに合うかと恐れているかのように、目をきょろきょろさせていた。要するに、彼は経験が浅く、びくびくしていて——頭の方もちょっと鈍そうだった。締めりのないあごをしていて、寒さのせいで、自分が鼻水を垂らしているのでさえ、明らかに気づいていなかったからだ。(でも、前にいったように、この時期、戦闘に加わっていない予備役には、よくあることだった。)

しかし、彼の武器は本物で、もてあそぶようなものではなかった。ポーター&アール社製のピッツバーグライフルで、銃尾にカセットのようなものが装着されていて、人差し指をぐいっと引くだけで、苦もなく連続して五ラウンド撃つことができる。ジュリアンも似たような銃を持っていたけれど、それは取り上げられてしまっていて、穴の開いた小さな樽に立てかけられていた。そこは、全く手の届かないところで、予備役はぼくのライフルをその横に置いた。

ぼくは自分を哀れに思い始めた。クリスマスイブなのに、なんとみじめな過ごし方を選んでしまったのだろう。予備役の振る舞いよりも、むしろ自分の愚かさや判断ミスに腹が立った。

「おまえが誰だか知らないが」と予備役がいった。「そんなことはどうでもいい——おれにとっては、徴兵忌避者の一人も二人も同じことだ——逃亡者を捕まえるのがおれの仕事だが、袋がいっぱいになってきた。明日の朝になったら、ウィリアムズ・フォードまで送り返すとするが、それまでは、そのままにいるんだぞ。とにかく、今晚は誰も寝るんじゃない。ともかくおれは寝ないからな、おまえたちはあきらめて、おとなしくしているんだ。腹が空いたら、そこに少し肉がある」

「腹が空いていないときなんて、生まれてこのかたなかったよ」ぼくがそういいかけたとなん、ジュリアンがさえぎった。「これは現実だ、アダム」と彼はいった。「ぼくたちはまんまと捕まってしまっ

た。ぼくを追ってこなければよかったのに」

「ぼくもそう思い始めているところだよ」

ジュリアンが意味ありげな視線を投げかけてきて、低い声で訊いてきた。「サムは——？」

「そこでひそひそ話すな」すぐさま、ぼくたちを捕らえた兵士がいった。

でも、ぼくはその間いかけの意味がわかっていたので、うなずいて、ジュリアンのメッセージを伝えたことを示した。それは、ぼくたちが救出される保証にはならなかったけれど。ウィリアムズ・フォードからの出口が厳しく監視されているだけでなく、サムはぼくのように人目を引かずに立ち去ることができないし、もしジュリアンがいなくなったことが知れ渡ったら、さらに見張りを増やし、ぼくたちを探すために、部隊を送り出すかもしれない。ジュリアンを捕まえた男は、明らかに見回りの兵士で、逃亡者を見つけるために巡回する任務を受けていて、その仕事をまじめに遂行したまでだった。

今、彼は、ぼくたちを自分の支配下に置いたことで、いくらか気を緩めていた。木箱の上に、できるだけ居心地よくなるように座って、ポケットからパイプを取り出し、中身を詰め始めた。そのしぐさから、いまだに緊張していることがわかったけれど、パイプを吸って落ち着こうとしているのかもしれない。というのは、中に入れたのは煙草ではなかったからだ。

予備役はケンタッキーの出身かもしれない。その州でそれほど地位の高くない人々は、麻の雌花の繊維を吸う習慣があり、ケンタッキーでは驚異的な量が栽培されていた。ケンタッキー大麻は縄や布や紙を作るために生産され、薬物としては、インド大麻に比べると、麻酔性が弱い。しかし、苦みの少ない煙は、それをたしなむ人を気持ちよくさせるといわれていた。吸いすぎると、眠くなったり、ひどく喉が渇いたりする。

兵士が気晴らしをして、こういった症状が現れることは願ってもないことだった。それで、ジュリアンは、ぼくに彼の悪癖の邪魔しないよう、黙っているように身振りで示した。予備役はポケットから油布の包みを取り出し、そこから乾燥した植物のようなもの抜き出して、パイプのボウルに詰めた。すぐに中身に火がつき、わずかにいい香りを漂わせた煙が、渦を巻きながら天井の裂け目にのぼっていき、キャンプファイアの臭気と混ざった。

夜が長いものになることは、明らかだった。ぼくは捕われたまま、辛抱強く待とうと思った。クリスマスのことや、暗い冬の朝についている両親の家の黄色い灯りや、早まった考えを起こさなければ、寝ていたかもしれない柔らかいベッドのことはあまり考えないようにした。

7.

ぼくは、これはジュリアン・コムストックの話だといって始めたが、うそだといわれてしまいそうだ。結局、ぼくの話が中心になってしまったからだ。

しかし、それには理由がある。自分のことばかり話して、うぬぼれていたということもあるけれど、それ以上に、そのころのぼくは、自分が思っていたほど、ジュリアンのことを知らなかったからだ。

ぼくたちの友情は、本質的には、少年同士の友情だった。ランズフォードの遺跡で、捕らえられて黙って座っていると、二人で一緒にしたことが次々と頭に浮かんでくる。本を読んだこと、ウィリアムズ・フォードの西の森のある丘で狩りをしたこと、哲学や人類の月着陸から釣り針への餌のつけ方や馬に馬具をつける一番いい方法まで、ありとあらゆることについて仲良く論じ合ったこと。一緒にいるときは、ジュリアンが権力者と深いつながりを持つ貴族であることや、彼の父親が英雄としてだけでなく、裏切り者としても有名であること、そして彼の叔父、デクラン・コムストックが大統領で、心の中では、ジュリアンの存在を面白く思っていないかもしれないということをつっかり忘れていた。

そういったものすべては、遠いところにあるように思えた。ジュリアンが本来持っている性質や考え方——優しく、好奇心旺盛で、自然主義者のような気質——は、政治家や将官のそれではなかった。大人になったジュリアンを思い描くとき、学術的あるいは芸術的な冒険を心ゆくまで追い求めている様子が浮かんでくる。アサバスカの頁岩からノアの大洪水以前の怪物の骨を発掘したり、映画の改良や制作をしたりしているかもしれない。彼は好戦的ではなかった。当時、偉大な人物といえば、全くといっていいほど戦争に関わっていた。

だからぼくは、ウィリアムズ・フォードに来る前のジュリアンもまたジュリアンであったことを忘れていた。ジュリアンの父親はブラジル軍に勝利したが、政治的陰謀というひき臼によって押しつぶされた。ジュリアンはその勇敢で決然とした、最終的に裏切りにあった父親の跡継ぎだった。彼はまた権力ある一族に生まれた強い影響力を持つ女性の息子でもあった——族はブライス・コムストックを絞首刑から救うだけの力はなかったが、叔父の気が狂ったような策略から一時的にジュリアンを守る力はあった。ジュリアンは、貴族による大きなゲームの中では、チェスの駒であると同時に対局者でもあった。そして、ぼくがこういったことをすべて忘れているときでも、ジュリアンはそうではなかった——そのような人たちが、ジュリアンを作ったのであって、彼らについてジュリアンが話そうとしなくても、彼らの存在はジュリアンの脳裏から離れなかったに違いない。

ジュリアンが、小さなことを怖がったのは本当だった——ぼくはまだ覚えている。チャーチ・オブ・サインの儀礼を説明したときは、動揺していたし、狩りが失敗に終わって、獲物がうまく仕留められず、動物が苦しんでいるのを見て、悲鳴をあげたこともある。しかし、今夜、この遺跡で、がっくりした状況の中でうとうとし、おじけづいて涙をこらえているのはぼくだった。ジュリアンはじっと座ったまま、額に散らばったほこりまみれの前髪の下から決然とした表情を見せ、銀行員のように冷静に考えていた。

狩りに行ったときは、ジュリアンは自分の意志が弱いからといって、最後のとどめを刺すように、よくぼくにライフルを渡したものだ。

今晚——もしその機会があったら——ぼくはライフルを彼に渡すだろう。

ぼくは、さっきいったように、うつらうつらして、ときどき起きては、予備役が座ったまま、まだ見張っているかどうか確認した。彼のまぶたは半分閉じていたが、吸っていた麻の花のせいではないかと思う。ときおり彼は、他の者には聞こえないような音をたてて、ピクッと動き、その後、座

り直すのだった。

彼はブリキの鍋で大量のコーヒーを沸かし、薪をくべるたびにそれを暖め直し、眠り込まないよう、十分な量を飲んだ。そのせいで、必要に迫られて、ときどき彼は、穴の中の離れた場所に行き、ある程度プライバシーを保ったうえで、身体の要求に応じなければならなかった。彼は、ピッツバーグライフルを持って行くので、ぼくたちが有利な立場になるわけではなかったけれど、ちょっとの間、聞きつけられることなく、ジュリアンが小声で話すことができた。

「あいつの頭はたいしたものじゃない」とジュリアンがいった。「自由になって、ここから出られるかもしれない」

「やつが脳みそじゃなくて、武器がぼくたちの足を止めているんだよ」とぼく。

「二手に分かれてみてはどうだろう。見ろよ、アダム。たき火の先だ——奥のがれきのところだ」

ぼくは見つめた。

暗がりでは動いているものがあった、ぼくにはそれが何だかわかった。

「ぼくたちには好都合かもしれない」とジュリアンがいった。「致命的なことにならないと話だけでも」ジュリアンの額には、汗がにじみ始め、目には恐怖の色が浮かんでいた。「でも、きみの助けが必要だ」

前にもいったけれど、ぼくは父さんの教会の特定の儀礼に参加したことはなく、蛇はぼくの好きな生き物ではなかった。それは本当だった。自らの意志を神にゆだね、それぞれの手に小柄なガラガラヘビを持った父さんを見たことがある。祈りを捧げながら、体を震わせ、聞いたことがないだけでなく、全くわけのわからない言葉（長母音と子音の繰り返しが多く、石炭ストーブで指をやけどしたときのような声だった）を発していた——神意がぼくを蛇の毒から守ってくれるということを完全に確信したことはなかった。信徒のうちのあるものは、明らかにそうではなかった。例えば、サラ・プレストリーは、右腕が毒でどす黒く腫れ上がり、ウィリアムズ・フォードの医者によって切断された……でも、それについて長々と話すつもりはない。いいたいことは、ぼくは蛇を嫌ってはいるが、ジュリアンのように、特に怖がっていたわけではないということだ。ジュリアンの自制心にはほとんど感心した。すぐ近くの暗がりでは、くねくねと動いているものは、たき火の熱によって起こされた蛇の群れだったからだ。

こういった崩壊した遺跡に蛇やネズミ、クモ、有毒昆虫がはびこるのは珍しいことではない。咬まれたり、刺されたりして死ぬのは、ティップマンが日常的に直面する危険だった。脳震盪、敗血症、埋没事故などもそうだ。冬になって、ティップマンが業務を中断した後、蛇は静かに冬眠しようと思っ、すきまから忍び込んだのだが、不運にもぼくたちと予備役がその眠りを妨げてしまったのだ。

予備役——トイレを済ませて、ちょっとよろけながら戻ってきた——はまだその先住者たちに気づいていなかった。木箱の上に腰を下ろし、ぼくたちを睨みつけ、慎重にパイプの中身を詰め替えた。

「もし、やつがライフル五発をすべて発射したら」とジュリアンがささやいた。「あいつをやっつけるか、武器を取り戻すチャンスが来る。でも、アダム——」

「おい、声を立てるな」予備役がぶつぶつといった。

「——きみの父さんの教えを思い出すんだ」ジュリアンが言い終えた。

「静かにしろといってるんだ！」

ジュリアンは咳払いをし、予備役をまっすぐ見て、話しかけた。「注意を払っていただきたいことがあります」

「どうしたというんだ？ このくそつたれ徴兵逃れが」

「このひどい空間にいるのは、ぼくたちだけではありません」

「おれたちだけではないだと！」予備役はそう言って、不安そうにあたりを見回した。そして、平静を取り戻して、うさんくさそうにジュリアンに目をやった。「他の人間など見えないぞ」

「人間とはいっていません。マムシです」とジュリアン。

「マムシ！」

「つまり、毒蛇です」

それを耳にしたとたん、予備役はぎくりとした。大麻の喫煙の影響で、ちょっと混乱していたのかもしれない。そして、彼はあざ笑ってこういった。「つづける。引っかけようとするんじゃないぞ」

「冗談をいっていると思われるのは残念ですが、少なくとも、十数匹の蛇が暗がりの中をこっちに進んできています。そのうちの一匹は、ほら、あなたの右足のブーツのすぐそばまで来ています」[ジュリアンのタイミングセンスは絶妙だった。ひょっとしたら、演劇好きのおかげかもしれない。]

「ふん」と予備役はいったが、いわれた方向に目をやらずにはいられないようだった。そこには一匹の蛇——丸々としていて、長い体をくねらせている——が頭をもたげ、彼のブーツの靴ひものあたりの匂いをかいでいた。

効果は観面だった。考える時間も与えなかった。予備役は木箱の椅子から飛び退くと、ののしり声をあげながら、後方へ飛び跳ね、同時にライフルを肩にやり、脅威と向き合った。そこには、一匹だけではなく、多数の蛇がいて、仰天した彼は、反射的に引き金を引いた。その結果、狂乱が引き起こされた。銃弾は、その生き物の大きな巢の近くに当たり、バネに挟まれていた弾丸が箱から飛び出すように、蛇たちは驚くべき速さで散り散りになった——哀れな予備役は不運にもちょうど彼らの通り道に立っていた。予備役は、激しくののしりながら、四回つづけて発砲した。そのうちのいくつかはすごいスピードで飛んでいったが、命中しなかった。少なくとも一発が、先頭の蛇の体の中間部を吹き飛ばし、血だらけの縄のようになった蛇は、傷のあたりをよじらせた。

「さあ、アダム！」ジュリアンが叫び、ぼくは立ち上がって考えた。父さんの教え？

父さんは無口で、教えてくれることのほとんどは、エステートの厩舎の仕事に関してのものだった。ぼくはうろたえて、ちょっとの間ためらった。その間、ジュリアンは奪われたライフルに向かって、踊り狂う神秘主義教団の修道者、ダルウィーシュのように、生き残っている蛇の間を飛び跳ねていった。いくらか落ち着きを取り戻した予備役は、同じ方向に飛んでいった。そのとき、ジュリアンに話したことのあるただひとつの父さんの教えを思い出した。

「頭のうしろに首のようなどころがある。そこをしっかりとつかむんだ。どんなにのたうちまわっても、しっぽは無視しろ。動かなくなるまで、頭を強く、何度も打て」

ぼくはその通りやった——敵を制するまで。

その間、ジュリアンは武器を取り戻し、蛇がいる場所から離れた。

彼は予備役を見て驚いた。ぼくの足元に倒れ、頭から血を流していた。ぼくが「強く、何度も打った」からだ。

「アダム」とジュリアンがいった。「きみの父さんの教えといったとき——ぼくがいていたのは蛇のことだったんだよ」

「蛇？」何匹かはいまだに穴の中をくねくねと動いていた。ぼくはジュリアンが爬虫類の性質や種類についてほとんど知らないことを思い出した。「あれは、アカダイショウだよ」とぼくは説明した。「体は大きいけれど、毒はないんだ」

ジュリアンは大きく目を見開いて、ぼくがいったことを理解した。

そして、もう一度、ながながとのびている予備役を見た。

「死んでいるの？」

「そうじゃないといいけど」とぼくはいった。

8.

ぼくたちは、廢墟の人口の少なかった一画に新しいキャンプを作り、通りに目を光らせていた。明け方に、一頭の馬と一人の人間が西から近づいてくるのが見えた。サム・ゴドウィンだった。

ジュリアンが手を振って呼び止めた。サムが近づいて来て、ジュリアンを見てほっとし、それからぼくを見て考えこんでいるようだった。ぼくは顔を赤らめた。サムの祈り（純粋なキリスト教から見れば、その祈りがどれだけ異端であったとしても）の邪魔をし、彼の本当の信仰を知って、自分が愚かな反応をしたことを思い出した。しかし、ぼくは何もいわず、サムも何もいわなかった。ぼくがジュリアンを助けにいったことで、ジュリアンに対する忠誠（あるいは自らの愚かさ）を示したことになり、サムとぼくの関係はいつもの通りに戻ったようにみえた。

クリスマスの朝だった。ジュリアンやサムにとって、特に何の意味もないだろうけれど、ぼくはそれを痛烈に意識していた。空はふたたび青く晴れた。夜明けにスクールが通り抜けたせいで、あたりに雪が散り、平らに張りついたまま、ぱりぱりに凍っていた。ランズフォードの遺跡でさえ、丸く縁取られ、奇妙なまでに美しく姿を変えていた。自然にとって、純粋という服で腐敗を覆い隠し、平和な世界を作るのは、なんと簡単なことなんだろう。ぼくは驚かされた。

だが、平和は長くつづかない、とサムはいった。「こうやっている間にも、軍隊が後ろに迫って来ている。ニューヨークからジュリアンを逃がすなという電報が届いた。ここでぐずぐずしている時間はない」

「どこに行くの？」ジュリアンは訊ねた。

「さらに東に行くのは無理だ。馬の餌になるものもないし、水も限られている。遅かれ早かれ南へ行き、鉄道か道路を使わねばならん。食料が足りなくなって、しばらくは厳しい行程となるだろう。う

まくやり遂げたとしても、別の人間のふりをしなければならない。徴兵忌避者や経済難民よりちょっとはましだろうが、しばらくは、労働者の連中にまぎれて行動することになるだろう。少なくとも友人たちがいるニューヨークに着くまでは」

それが計画だった。しかし、途方もなく心細いもので、前途を考えると心は沈んだ。

「捕虜がいるんだ」とジュリアンがいった。彼はサムを発掘された遺跡へ連れていき、どうやって一夜を過ごしたか説明した。

予備役はそこにいた。両手を後ろで縛られ、ぼくの強打のせいで、少し、意識がもうろうとしていたが、目を開け、顔をしかめるまでにはなっていた。ジュリアンとサムは、その邪魔者をどうするか、少しの間、話し合っていた。もちろん彼と一緒に連れていくわけにはいかない。問題は、いたずらに自分たちを危険にさらすことなく、どうやって彼を上官のいるところに帰すのか、ということだった。

その議論について、貢献できることは何もなかったので、ぼくは背負い鞆から鉛筆と紙片を取り出し、手紙を書くことにした。

母さんに宛てたものだ。父さんは読み書きができないからだ。

「きっとぼくがいなくなったことに気がついていると思います」ぼくは書き出した。「特にこの時期に（クリスマスの日に書いています）家を離れて、悲しく思っています。ですが、ぼくは大丈夫です。差し迫った危険もありません」

（「差し迫った」の定義によっては、うそをついていることになるが、思いありのやるうそならかまわないだろうとぼくは考えた）

「いずれにせよ、ウィリアムズ・フォードにいつづけることはできなかつたのです。たとえ、数ヶ月あとに延ばしたとしても、徴兵を逃れることはできませんから。徴兵は本格的に始まっています。ラブラドルの戦争はうまくいっていません。自分の家とその安らぎすべてを失うことがつらくとも、離ればなれになることは、避けられませんでした」

（ぼくにできるのは、ページのあちこちを涙で飾らないようにすることだけだった。）

「お父さん、お母さん、いままでいろいろお世話になりました。心から感謝をしています。ありがとうございました。次に書ける 때가来次第、またお便りします。ぼくは誠実に、自分の運命に従います。これまで教えていただいたキリスト教の教えにのっとって。来年もそして毎年、神の祝福がありますよう」

それで十分なわけではなかつたけれど、もう時間がなかつた。ジュリアンとサムがぼくを呼んでいた。ぼくは署名し、追伸を付けくわえた。

「父さんにいってください。ぼくが父さんの教えを大事にしていると。すでに役立ちました。親愛なるあなた方の息子、アダムより」

「手紙を書いたのか」ぼくを馬へとせかしながら、サムが気づいていった。「だが、どうやって出すか、考えてみたのか？」

ぼくは何も考えていなかったことを認めた。

「予備役が持って行けるだろう」すでに馬に乗っていたジュリアンが答えた。

予備役も馬に乗っていたが、両手は後ろに縛られたままだった。サムが出した結論は、予備役を解放し、馬が西に向かうようにすれば、そのうち軍隊にぶつかるだろうというものだった。予備役は起きてはいたが、さっきもいったように、ふてくされていた。彼はほえるように叫んだ。「おれは誰の郵便配達人でもないぞ！」

ぼくは宛名を書き、ジュリアンがそれを取って、予備役の鞍袋に押し込んだ。その若さ、そして、ぼさぼさの髪にくしゃくしゃの服といった格好にもかかわらず、ジュリアンは背筋をまっすぐにして鞍に座っていた。気高さが、彼の態度や声に宿っていた。その瞬間ぼくは初めて、彼が貴族であることを認識した。ジュリアンは予備役にいった。「ぼくたちはおまえを親切に扱った——」

予備役は口汚くののしった。

「黙れ。おまえは戦いで怪我を負った。だが、ぼくたちはおまえを捕虜にして、おまえがぼくたちにしたよりも、はるかに紳士的におまえに接した。ぼくはコムストックだ——少なくともしばらくの間は——どんなことであれ、ぼくに対して、一介の兵士がぞんざいな口をきくことは許されない。この少年の手紙を届けるんだ。ありがたく思ってるんだ」

予備役はジュリアンがコムストック一族のものだと知って、明らかに、恐れおののいていた——彼はぼくたちをただの脱走した少年だと思っていたのだ——しかし、彼は勇気を奮って訊いてきた。「どうしておれが？」

「キリスト教に従えば、そうなるからだ」とジュリアンがいった。「叔父との問題に決着がついたら、おまえの首をはねる権力がぼくの掌中に入るかもしれない。わかるかい？」

予備役はわかったことを認めた。

そしてぼくたちはクリスマスの朝、遺跡を後にした。ティップマンが『宇宙にける人類の歴史』を発見した遺跡。そして、本はいまだにぼくの背負い鞆の中にあっただ。半ば忘れられた、あいまいな記憶のつづられた本。

頭の中はいろいろな考えや不安で混乱していたけれど、ジュリアンがいったことを思い出していた。今では遠い昔のことにように思える。それはDNAについての話で、DNA自身は完璧な複製を求めているが、自らを不完全に記憶しながら受け継がれていく、というものだ。それは本当かもしれない、とぼくは思った。ぼくたちの人生もそれに似ている——時間そのものがそうだ。刻一刻と消えては、ゆがんで投影された世界が生まれる。今日はクリスマス。ジュリアンは、それはかつて異教の祝日で、不敗の太陽神ソル・インヴィクトゥスや他のローマの神々に捧げた日だったという。今では通俗的な祝い事になってしまい、そのため、重要性が薄れてしまった。

(ウィリアムズ・フォードのドミニオン教会のホールから、クリスマスの鐘の音が聞こえたような気がした。しかし、それはありえなかった。ぼくたちは町からとても遠い場所にいるし、大砲の音でさえも、大草原を越えてこんなに離れたところに届くことはなかった。記憶がよみがえっただけだった)

そして、これは、人についてもいえることかもしれない。ぼくは、すでに、数日前のぼくの不正確なこだまなのかもしれない。ジュリアンについても同じだ。すでに、何か頑固で、妥協しないものが

彼のやさしい顔立ちに現れ始めていた——新しいジュリアン、進化したジュリアンの発現だ。それは、ウィリアムズ・フォードから急な出発を強いられたことによって、あるいは、生まれ変わるため、ニューヨークに向かってうつむきながら進んでいくうちに生じたものだ。

しかし、それはすべて哲学で、たいして役に立つものではない。ぼくはそのことについて何もいわないでおくことにした。そして、ぼくたちは、鉄道の方へと馬を駆り立てた。誕生したばかりの、産声を上げている未熟な未来へと。